



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

朴 一 昊 教授指導
碩士學位 請求論文

遠藤周作のキリスト観

— 『沈黙』と『イエスの生涯』を中心に—

2009

誠信女子大學校 大學院

日語日文學科

李 成 姫

遠藤周作のキリスト観

— 『沈黙』と『イエスの生涯』を中心に—

朴 一 昊 教授指導

이 論文을 碩士學位論文으로 提出함

2008年 11月

誠信女子大學校 大學院

日語日文學科

李 成 姬

認 准 書

李成姬의 碩士學位 論文으로 認准함.

審査委員 _____ 印

審査委員 _____ 印

審査委員 _____ 印

誠信女子大學校 大學院

論文概要

본 논문은 엔도슈사쿠(遠藤周作-이하 엔도라고 칭함)의 『침묵』과 『예수의 생애』에서 공통적으로 나타나고 있는 로드리고와 예수의 생애를 통하여, 엔도의 그리스도관에 대하여 살펴보았다.

엔도는 일본에 있어서 카톨릭 문학을 대표하는 작가로서 카톨릭 문학의 창작에 일생을 걸었다. 『침묵』은 소설로서 1966년에 간행되어 세계적으로 이미 잘 알려져 있는 작품이다. 『침묵』 이후, 1968년 어머니와 헤르쵸쿠신부를 제재로 한 소설 『영법사』와, 1969년에 역시 어머니를 소재로 한 소설 『어머니인 신』, 1973년에는 예수를 둘러싼 군상을 그린 연작 『사해의 부근』이 간행되었다. 그러나 이 소설이 독자에게 잘 이해되지 않았던 것을 계기로 전기문학에 관심을 기울이게 되어, 일본인에게 근접할 수 있는 예수상을 탐구하여 오랜 성서연구의 결실인 『예수의 생애』가 간행되었다.

『침묵』이 발표되고 7년이라는 세월동안 한결같았던 어머니와 예수라는 두 개의 원체험이 하나로 중첩되어, 일본문학사상 뿐 만 아니라 일본 기독교 역사상에도 남을 『예수의 생애』라는 작품으로 탄생하게 된다.

『침묵』에서 선교사 로드리고는 기치지로라고 하는 일본인(배교자)의 안내를 받아 일본으로 잠입하여 포교하지만, 결국 기치지로의 배신으로 수난을 당하게 된다. 선교사의 교리로서 순교를 원하지만 일본인 신자의 죽음을 막기 위하여 배교를 하는 주인공의 갈등 속에 신은 침묵으로 일관하고 있다.

『예수의 생애』에서는 민중과 제자들의 기대와는 달리 예수를 무력, 무능한 신으로 그리고 있다. 전능자로서 강하게 나타나는 신이 아니

라, 절망적인 인간 앞에서 침묵하고 무력한 신으로 나타나는데 의문을 갖게 한다.

두 작품에서 나타나는 엔도의 예수상은 어떠한 것일까. 일맥상통하는 부분이 여타 작품보다 많아 이 두 작품을 논문에서 다루고자 하였다.

연구방법으로서는 먼저 일본의 기독교와 기독교 문학, 엔도의 신앙적인 배경을 파악하고, 일본의 기독교 수용에 있어서의 배경과 토착화 되지 못한 여러 가지 이유를 분석했다.

그 다음으로, 『침묵』의 등장인물 세 사람을 통해 엔도의 예수상과 기독교가 뿌리내리기 어려운 일본의 풍토를 살펴보고, 예수를 배반한 유다에게 작가자신을 투영하고 있음을 살펴보았다.

그리고 『예수의 생애』에서는 반복되어 사용되는 무력과 무능, 사실과 진실이라는 단어적 표현을 통한 의미와, 세례요한과 예수를 대비한 엔도의 예수상을 고찰하였다.

마지막으로 『침묵』의 로드리고와 『예수의 생애』의 예수에 있어서 수난과 구원이 어떠한 관계성을 갖고 있는가를 비교하고, 『예수의 생애』에서만 언급하는 수수께끼에 대하여 살펴보았다.

기독교가 뿌리 내리기 어려운 오랜 역사와 전통이 뿌리 깊은 일본에, 어머니를 통하여 받아들인 기독교는 엔도에게 있어 몸에 맞지 않는 양복이었고, 그로 인해 엔도는 자신의 몸에 맞는 일본의 기모노로 바꾸게 된다. 그의 서구의 예수상, 즉 강하고 힘 있는 아버지와 같은 예수상에서 점점 일본인의 감성에 맞는 약하고 자상하고, 용서의 어머니와 같은 예수상으로 변화되어 간다. 성경에서 예수를 은30에 파는 유다까지도 용서의 손을 뻗치는 그러한 예수상으로 변화되어 가는 것이다.

예수는 기적을 행하기보다 무력과 무능한 모습으로 십자가에 달려 죽으며 자기를 배반한 제자와 군중들을 용서하였다. 기적을 발휘하여 그들의 기대에 만족을 줄 수 있지만, 예수는 순간적인 기쁨을 주는 자가 아닌, 위로자로 영원한 동반자가 되었던 것이다. 성경의 기적의 이야기를 사실로서가 아닌 진실로, 위로의 이야기를 사실로 다룸으로써 사실 그대로를 믿는 것과 동시에 진실을 더욱 강하게 인정하는 것으로 그 깊이가 더 해 간다고 할 수 있겠다. 또한 세례요한을 구약의 아버지의 신으로, 예수를 신약의 어머니의 신으로 표현하는 것은 그의 예수상을 더 명확히 보여 주는 부분이다.

로드리고와 예수의 수난을 통해 예수의 사랑을 극대화시키며 수난의 과정 뒤에 나타나는 구원은, 이 세상을 살아가는 어떠한 인간에게도 실망이 아니라 인내 속에 열매 맺어질 구원을 소망하도록 한다고 할 수 있겠다.

부활 후, 예수를 배반했던 제자들이 각지에 흩어져 예수의 가르침을 전파하게 되는데 그 이유가 의문의 여지로 남는다. 엔도의 이러한 수수께끼는, 『예수의 생애』의 연장선상이라고 할 수 있는 『그리스도의 탄생』에서도 나타난다.

엔도의 수수께끼를 푸는 방법으로 기독교의 삼위일체론에 엔도의 작품을 대조해 보았다. 엔도의 두 작품에는 성부 하나님과, 성자 예수가 그려져 있지만 성령에 대한 언급이 되어 있지 않다. 그러나 성경을 기본으로 하면서도 일본인이 받아들일 수 있는 기독교를 그려나갔다고 하는 점에서, 성령을 직접적으로 표현했다고 하기 보다는 독자가 스스로 의문을 통하여 관심을 기울이도록 작품을 마무리했다고 볼 수 있겠다.

두 작품에서 나타난 엔도의 그리스도관은 반복되어 강조되고 있는

것처럼, 인간이 이해할 수 있는 한 어머니의 사랑으로 대체하여 신의 사랑을 그리고 있다.

즉, 그 신은 거룩하여 가까이 대하기 어려운 신이 아니라, 무력하고 무능하여 자기를 배반한 자들을 용서하고, 결국엔 십자가에 죽기까지 사랑하는 사랑의 신이다. 또한 침묵하고 있는 듯 하지만 결코 침묵하지 않고 함께 아파하는 신으로서 사랑의 동반자가 되어 주는 신인 것이다.

결론적으로, 작품에서 나타난 엔도의 그리스도관은 표면적으로는 명확하게 드러나고 있지는 않지만, 성서에 근거하여 충실하게 작품에 반영되었다고 보여진다.

目 次

論文概要

I. 序 論	1
II. 本 論	
1. 遠藤周作とキリスト教	
1. 1 日本におけるキリスト教と文学	6
1. 2 遠藤周作の信仰的背景	9
2. 『沈黙』における人物の造形と意味	12
2. 1 イエスに対するロドリゴの認識の変化	12
2. 2 フェレイラの背教と日本的風土	21
2. 3 キチジローにおける背教と救援	26
3. 『イエスの生涯』におけるイエス像	30
3. 1 無力と無能	31
3. 2 事実と真実	37
3. 3 洗礼ヨハネとイエス	40
4. 『沈黙』と『イエスの生涯』における受難と救援	46
4. 1 ロドリゴとイエスの受難と救援	47
4. 2 遠藤におけるイエスの「謎」	59
III. 結 論	70

参考文献

ABSTRACT

遠藤周作（1923～1996）は、日本におけるカトリック文学を代表する作家としてキリスト教文学の創作に一生を捧げた。遠藤の宗教的信念は、母の信仰の影響を受けたといわれる。キリスト教と文学のかかわりは、作家生涯の実存的な課題として、避けられない重大な問題であった。

遠藤はフランスの留学生活を通して西欧のキリスト教に接した時、日本はキリスト教の「根をおろさぬ風土」であることに気づいた。それ以来、日本的なイエス像を求めてきたのである。

遠藤はカトリック作家としての責任感を持って、宗教と文学の問題に取り組んできた。特に、細川正義が述べたように、その姿勢は「東洋的、そして日本に於ける汎神的風土においてキリスト教信仰の日本定着の可能性を明確に問うていかなければならないという意志が込められたもの」¹⁾であった。

遠藤は一九四四年、堀辰雄の随筆『曠野』によってモーリヤックの名や小説論をはじめて知る。モーリヤックの小説論に注目して、人間の「肉の問題」、「愛欲の問題」を探るようになった。²⁾モーリヤックの場合、愛欲は、自然と恩寵、言いかえれば、官能の欲望と信仰の対立の問題として書かれている。しかし、モーリヤックの影響を受けた遠藤の「愛欲の問題」は、モーリヤックとは異なった観点から取り上げられている。遠藤において「愛欲の問題」は、罪に対する本能的な怖れを自分自己の心中に見いだし得ないがゆえに、モーリヤックとは反対であった。遠藤をもっとも不安にさせたものは、罪にも死にも無感覚な日本人の心であった。こうした心性によるものとして、処女作とも言うべきエッセイの「神々と神と」³⁾、二年半のフランス留学の後書かれた評論『カトリック作家の問題』⁴⁾、最初の小説『アデンまで』⁵⁾などが挙げられる。

1) 細川正義「遠藤周作文芸とキリスト教―『沈黙』に至る道」『人文論究』（関西学院大学人文学会、2006年5月）3頁。

2) 高山鉄男「モーリヤックと遠藤周作」『国文学』（学灯社、1993年9月）70-71頁。

3) 1947、『四季』第5号。

4) 1954、早川書房。

そのような罪や悪に無感覚な日本人の心、という遠藤文学の重要な主題をはぐくむにあたって、世界的に知られている『沈黙』を書くに至る。『沈黙』はポルトガルの司祭ロドリゴが信徒たちの苦しい殉教に接し、苦悩のすえついに踏絵を踏んで、棄教にいたる物語である。⁶⁾

遠藤の文学は、カトリックの文学としての価値観がほぼ定着しているともいえる。 「武田友寿に代表される『弱者の復権』、石丸晶子による『<ユダ>の運命とその救済』、佐藤泰正氏によって詳細に研究された『同伴者イエス』、遠藤周作自身の言にもある『母の宗教』」⁷⁾など、『沈黙』を論ずる諸氏の研究をもとに、カトリック文学としての価値、意義を理解することができるのである。

しかし、作品の評価が高まり、多くの読者を獲得するにつれて、世界のマジョリティである正統派のカトリックからの、「文学的」というより「神学的」、あるいは、「護教的」な糾問がなされた。それにもかかわらず、西欧的なキリスト教しか考えることを許されていなかった人々に、遠藤文学の与えた影響は決して少なくない⁸⁾と高堂要は述べている。

『沈黙』の刊行から七年後に発表された『イエスの生涯』は、新約聖書の福音書に基づいて、イエスの評伝として書かれた作品である。⁹⁾ ヨルダン川の受洗から十字架の死刑まで聖書「ヨハネ福音書」の流れに即しながら¹⁰⁾、聖書そのままのイエスではない遠藤独自のイエス像を構築している。聖書でみられる

5) 1954、三田文学。

6) 高橋千劍破「遠藤周作における心の故郷と歴史小説」『遠藤周作を読む』（笠間書院、2004）88頁。

7) 菅原とよ子「遠藤周作『沈黙』論（二）日本人の琴線に触れた文学」『国語国文学研究』（熊本大学文学部国語文学会、2006年3月）56頁。

8) 高堂要「海外における遠藤文学評価」『国文学』（学灯社、1993年9月）85頁。

9) 天羽美代子「遠藤周作『イエスの生涯』における<イエス像>造形過程の一考察—シュタウファー『イエス—その人と歴史—』の影響について—」『高知大学国語国文学会』（No.35）（高知大国文、2004）49頁。

10) 注9)の上掲書、49-58頁。

「聖なるイエス」のイメージを修正して、「同伴者」であるイエスを描いている。

遠藤は『沈黙』や『イエスの生涯』が緊密な関係にあることを、次のように述べている。

小説のほうでは『沈黙』から私は書いてきた踏絵を、黒い指で踏んだような弱者と、そして母の宗教としてのイエスの関係をテーマにして書かねばならぬと思ったし、また母なる宗教としてのイエスが、実際的に聖書の中で事実として、どう語られているかということ进行分析するのが、評伝の『イエスの生涯』であった。¹¹⁾

上で遠藤が述べているように、『沈黙』や『イエスの生涯』はどの作品より彼の信仰観を明確に現わしたと思われる。

『沈黙』と『イエスの生涯』はジャンルの面で、前者は史実に基づいて書かれた小説であり、後者は批評を加えた伝記の形の人物評伝である、という違いがある。

しかし、両作品はテーマにおいて互いに共通しつながっている点がある。

『沈黙』において殉教と背教の間で葛藤する宣教師に、絶対者の「沈黙」は、まるで「無力」や「無能」な存在であるように捉えられる。そのような神の「無力」や「無能」は人間には絶望だけをもたらす。『イエスの生涯』でもイエスが十字架に掛けられるまで神は「沈黙」している。遠藤は『イエスの生涯』で次のように述べている。

次に彼等は当然、こういう疑問をもった。イエスを神はなぜ助けないの

11) 遠藤周作「異邦人の苦悩」『遠藤周作全集13』(新潮社、2000)177頁。

か、なぜあの苦しみに沈黙を守り、あの死の苦悶にも眼をつぶっておられたのか。（『イエスの生涯』[新潮社、1966]231頁。以下、『イエスの生涯』と略す。）

上の『イエスの生涯』における神の「沈黙」からは、『沈黙』においてロドリゴに「沈黙」を守っている神が思い浮かべられる。受難の前に神は「沈黙」し、「無力」で「無能」な存在としてしか見えない。

しかし、実は『沈黙』で神は決して「沈黙」していたのではない。「あの人は沈黙していたのではなかった」、「私の今日までの人生があの人について語っていた」（『沈黙』[新潮社、1973]295頁。以下、『沈黙』と略す。）とロドリゴは語っている。細川は「つまり<沈黙>という表層的な形態をとっているけれども、その奥に神のささやきがある、語りかけがあるということと、背中合わせにして<沈黙>というのは出来ているのです」¹²⁾と述べている。このように『イエスの生涯』でも「イエスが語ってやまなかったことが何だったかは、十字架上の三つの言葉を聞くだけで充分だった」（『イエスの生涯』242頁。）と遠藤が述べたように「沈黙」していなかったのである。

そのように『沈黙』と『イエスの生涯』で共通的に「沈黙」し、「無力」で「無能」な存在であったイエスの語りかけは何であるのかという問題について、今までの研究は比較分析を試みていない。

従って、『沈黙』における人物の造形と意味を通して、究極的に遠藤が表わそうとした宗教観について考えてみたい。そして、『イエスの生涯』の中で、表われている「イエス像」は、遠藤のキリスト観が表出されている媒介であると思われる。この『沈黙』と『イエスの生涯』を通して、遠藤のキリスト観を探ってみようとするのは、「受難」と「救援」という点で、緊密な共通点が見出さ

12) 注1) の前掲書、23頁。

れるからである。

遠藤が全生涯を通して、カトリック文学に残してきた作家の軌跡の意義を、『沈黙』と『イエスの生涯』の中で、見出すことができる。二つの作品を比較して分析した研究が少ないし、共通的に作品の中で登場する「謎」については研究されていない。この点に着目して、『沈黙』と『イエスの生涯』を中心に、遠藤のキリスト観に関する論を進めたい。

1. 遠藤周作とキリスト教

1. 1 日本におけるキリスト教と文学

遠藤のキリスト教文学の作品には、彼が体験した西欧のキリスト教の絶対価値とそれを認めない日本の汎神論の風土が述べられている。日本へキリスト教が伝えられた状況を細川正義は、次のように述べている。

日本にキリスト教が伝達されたのは、古くは一五四九年にスペイン人ザビエルが鹿児島に上陸して以来とされている。ザビエルは二年三ヶ月の間、西日本各地で布教活動を行い、約7百名の信者をもたらせたが、以後、織田信長や豊臣秀吉が一時、キリスト教を奨励したときがあり、全国に優れたキリシタン大名や沢山の信者が生まれ、千六百年のはじめには信者は九十万人近くの数に及んだ。¹³⁾

一時、キリスト教を奨励して多数の信者があったが、「一五八七年以後、日本の太守、秀吉が従来の方策を変えて基督教を迫害し始めると、まず長崎の西坂で二十六人の司祭と信徒たちが焚刑に処せられ、各地であまたの切支丹が家を追われ、拷問を受け、虐殺されはじめた。徳川将軍もまたこの政策を踏襲して一六一四年、すべての基督教聖職者を海外に追放することにした」（『沈黙』5頁。）と、『沈黙』のまえがきに記されている。一時奨励したのも日本の中にキリスト教を受容するためではなく、西洋の先進文物を受け入れ自国の利益を図る方便にするためであった。宗教として受け入れられたのではないから、本来のキリスト教を土着化させるのには根本的に問題があったのである。佐

13) 注1) の前掲書、3頁。

藤泰正は、これを言語伝達の問題と解釈の問題として捉えている。

言葉は風土と伝統の中から生まれてくるものだから、中近東で生まれ地中海で育ちヨーロッパ全土からアメリカまで広がってきたキリスト教は、固有の概念を現わす固有の言葉をもって日本に入ってきた。それをなんとか訳すことで日本のキリスト教会は形成されてきている。¹⁴⁾

ヨーロッパから流入したキリスト教が言語伝達と解釈の過程で形成されるということは、どこの国でもその言語が独自のものである場合には、同様にありうる問題である。そして、自国の言語に変換し解釈することによって誤解や変質は生じる。

『沈黙』のフェレイラによると、聖ザビエル師に教えられた「デウス」という言葉は「大日」という発音と似ているため、陽を拝む日本人は「デウス」を「大日」と認識したのであった。（『沈黙』233頁。）仏教の言葉に慣れている国にキリスト教の耳慣れない難解な言葉が伝えられた時、誤解や変質が生じ得るのである。

しかし、これらだけがキリスト教の受容の障害とは限らない。それよりも、日本の伝統的な宗教観や、文化・道徳・生活を支配してきた日本的な感性などが西欧の異質的なキリスト教を受け入れがたいものにした要因であると思われる。

このような言語伝達の解釈の問題や、日本的な感性の要因の影響を、現在日本人の中でキリスト教信者の数がカトリックとプロテスタントを合わせても国民の1%しかいない¹⁵⁾点からも推し量ることができよう。

一方、日本の文学者たちはキリスト教をどのようなものとして認識したのであろうか。有島武郎や志賀直哉などは内村鑑三に感化を受け教会で洗礼をうけた

14) 注7) の前掲書、11頁。

15) 注1) の前掲書、3頁。

が、後に教会を脱退した。日本の文学者にとって、西欧からの一神論の基督教を消化し、日本文学にあてはめることが至難なことであったと考えられる。遠藤はこの問題について、次のように説いている。

その一例として彼らの神が愛の神ではなく、自己の肉欲や邪心をたえず責める怒りの神であったことに注意するがよい。その後の日本文学자들이基督教的神を想うときも、その神はおおむね、罰する絶対者の映像なのである。16)

上のように日本の文学者たちにとってキリスト教は、裁きの宗教として認識され、彼らは西欧の厳父のような神を、日本文学にたやすく取り入れることはできなかった。「文学者の中の正宗白鳥が、基督教に対する一方的解釈が生まれ、その上に異質感がかぶさり、やがて氏と基督教との別れが生まれたのであろう。」17)と遠藤が説いたように、キリスト教を単純に「父の宗教」としか考えなかったためである。

なお、遠藤は、興味深く調べた「島崎藤村、正宗白鳥、北村透谷、国木田独歩」というような人たちがいる。若い時、キリスト教に帰依したが、彼等が信仰を棄てた時、別に神にそむいたという苦痛感も罪悪もないのに注目した。

「基督教がこうした日本の知識人にも、根本的にくいこまなかった何かがあるのではないか」18)と言っている。つまり、「東洋的な汎神論の世界を日本人のだれもが心の郷愁として持っているが、これこそ基督教とはもっとも相反したものだ」19)というのである。

遠藤は、基督教が日本人の感覚と相容れないという点を指摘したのである。

16) 遠藤周作「基督教と日本文学」『遠藤周作全集12』(新潮社、2000)205頁。

17) 遠藤周作「父の宗教・母の宗教」『遠藤周作全集12』(新潮社、2000)371頁。

18) 遠藤周作「私とキリスト教」『遠藤周作全集12』(新潮社、2000)307頁。

19) 注18)の上掲書、306頁。

日本人の感覚には基督教を受け入れないものかがあることを、日本人の謎のような感覚だけでなく、自分の中に見出したのである。それは「神に対する無感覚、罪に対する無感覚、死に対する無感覚とあげることができる」²⁰⁾と説いている。

上述のような日本における基督教の受容の問題は、遠藤にとって重要なテーマとなった。「日本という国で暮らしている日本人の共感を得よう」と²¹⁾、遠藤はカトリック作品の創作活動に全力を尽くしたのである。

1. 2. 遠藤周作の信仰的な背景

日本の汎神論的な精神風土の中で、西欧の基督教について日本人の共感を得ようとした遠藤は、どのような信仰的背景をもっていたのだろうか。

遠藤は一九二三年東京に生まれ、三歳の時、父の転勤で満州の関東州・大連に移った。十歳の時、父母の離婚のために母親に連れられ、神戸に戻って来る。神戸に住んでいた伯母がカトリック信者であったので、遠藤も母親と一緒に夙川の教会に通うことになる。やがて、母親と共に遠藤もカトリックの洗礼をうけることになる。遠藤は「正確にかたるならば『受けた』というより『受けさせられた』といったほうがいい」²²⁾と語った。思春期の時は母に反抗したりしたが、母が死んだ後、父のもとに寄宿するようになってから、精神的な「母」のイメージが蘇生するようになる。母と反対の生き方をしている父を通して、今まで拒否し続けてきた「母」を見直さずにはいられなかったのである。²³⁾

彼を生み、育てた「母」をめぐる「経験」と「記憶」は、遠藤の原体験の総体である。「記憶にある限り、病気の時、母から手を握られて眠ったという経

20) 注18) の前掲書、306頁。

21) 山根道公「解題」『遠藤周作全集11』(新潮社、2000)356頁。

22) 遠藤周作「合わない洋服」『遠藤周作全集12』(新潮社、2000)395頁。

23) 武田友寿「母性をめぐる体験」『遠藤周作の世界』(朝日出版社、1997) 123頁。

験は子供時代にもない。一生、すぐに思い出す母のイメージは、烈しく生きる女の姿である。たった一つの信仰を求めて、厳しく孤独な生活を求めていた母である」といった遠藤の言葉について、高橋英夫は「遠藤にとっての『母』は、優しさと許し、背後に母の厳しさを隠していた」²⁴⁾と説いている。母を通して受け入れたキリスト教は最初から自分に合うものではなかった。しかし、遠藤は「愛する者が私のためにくれた服を自分に確信と自信がもてる前にぬぎすてることはとてもできなかった」²⁵⁾と述べている。

遠藤に母は宗教だけでなく、文学者になるように勇気も与えた。遠藤は学生の時、不成績で、周囲の者や親戚の人たち、先生からも馬鹿扱いをうけて、劣等感に悩まされた。そうした時に、母は「お前には一つだけいいところがある。それは文章を書いたり、話しをするのが上手だから、小説家になったらいい」といつてくれた。²⁶⁾母の影響でカトリック信者として小説家になった遠藤は、キリスト教の文学を勉強すればするほど感じる、西洋と自分との距離感を考えずにはいられなかった。その距離感は、一九五〇年（昭和二五）のフランス留学の体験によって、更に強められる。大使館も無く、平和条約も結ばれていないフランスの中で、一人で勉強しながら「距離感のあるキリスト教を、どうしたら身近なものにできるか」²⁷⁾という問題に取り組んだ。それで、遠藤自信が表現したように、西欧のキリストという「洋服を日本人の体に合う和服に」変えようにした。

自分が今まで生きてきた東洋という汎神論的な世界とヨーロッパという一神論的な世界との大きな距離感を噛みしめていたのである。日本人の自分の中に流れている<神々の世界>に血を絶えず意識させられなが

24) 高橋英夫「遠藤文学における弱者と母」『遠藤周作の世界』（朝日出版社、1997）126頁。

25) 注22) の前掲書、395頁。

26) 遠藤周作「母と私」『遠藤周作全集12』（新潮社、2000）392頁。

27) 注11) の前掲書、173頁。

らも、決して受身的な姿勢の中に逃げ込まず、執拗にヨーロッパの本質に触れていこうとしていたのである」²⁸⁾

遠藤は三年後に肺結核発病のため、途中で留学を断念しなければならなかったが、留学中、自然描写を通して創造主の秩序を賛美するよりは、人間の暗い内部を覗き込もうとしていたフランスの作家、モーリヤックの影響を受ける。作家としての人間凝視の義務に対する考え方は、遠藤が作品を書く際の基調になり²⁹⁾『海と毒薬』『わたしがすてた女』『沈黙』などに反映されるようになる。特に『海と毒薬』は、神が存在しない日本人の精神風土を怖ろしく感じ、他人の眼だけを意識する自身に気づく作品である。そして遠藤が評論家から作家になることを志したのは、従来の日本文学にないカトリック文学の分野を開拓するためでもあった。それまで神と人間の問題に真っ正面から取り組んだ作家がいなかったからである。³⁰⁾

遠藤は留学後、『有色人種と白色人種』を書いて、初めてのヨーロッパ体験が自分にとってどのような状況であったのかを明確に浮かび上がらせた。留学時代に痛感した東洋人への人種差別とモーリヤックの作品によって得られた人間凝視の問題は、遠藤の諸作品の主題的な基調となったのである。

28) 広石康二『遠藤周作のすべて』（潮文社、1991）31頁。

29) 注28)の上掲書、39頁。

30) 注28)の上掲書、64頁。

2. 『沈黙』における人物の造形と意味

2. 1 イエスに対するロドリゴの認識の変化

『沈黙』は、遠藤がカトリック作家として、カトリック文学の分野を開拓するための使命感を持って書かれた作品であると思われる。主人公であるロドリゴの行為と認識に遠藤の信仰観が明確に表現されている。外国人宣教師の日本への潜入事件から踏絵を踏むところに至る過程において、ロドリゴの心の中でキリストの顔と使命感は変化していく。

まず、キリストの顔の変化に対する意義を、作者は「『沈黙』という小説は、（中略）私にとって一番大切なことは、外人である主人公が、抱いていたキリストの顔の変化である」³¹⁾と指摘している。ロドリゴはキリストの顔を、踏絵を踏む時まで十三回も思い浮かべるのである。³²⁾作家は、キリストの顔の変化を通して、西洋のキリスト像が日本のキリスト像に変化する有様を示している。

ロドリゴはヨーロッパから布教の熱情を抱いて、師フェレイラの転びの真相を確かめに来日するが、彼が当初抱いていたキリストの顔は、威厳を持っている、力強いキリストの顔であった。

更に王者たる威厳にみちた顔が多くの中世の画家たちによって描かれました。だが今夜の私にとっては、その顔は（中略）なまなましく記憶に残っています。その表情は、チベリアデの湖辺で使徒たちに向かい「我が羊を牧せよ」と三度、命じられた時の励ますような雄々しい力強い顔でした。私は基督の顔にいつも引き付けられるのです。（『沈黙』31頁。）

31) 注11) の前掲書、175頁。

32) 笠井秋生『遠藤周作論』（双文出版社、1987）155頁。

威厳に満ちたイエスの顔は、ロドリゴが捕らえられた時や、牢舎につながれた直後にも思い浮かべるキリストの顔であった。それは拷問にかけられた時でさえ決して美しさを失っていない顔であり、何ものも犯すことのできぬ、何ものも侮辱することのできぬ顔であった。

私の主人公は、心の中に力強い威厳のある、そして秩序をもった、秩序が支配するようなイエスの顔をもっていた。³³⁾

ロドリゴはついに捕らえられて、踏絵の前で立たされた。彼が初めて日本で見た、日本人の手によって作られたキリストの顔は、彼がヨーロッパ人として考えていた、上のような秩序が支配するような顔だった。

しかし、ロドリゴの抱いた力強いキリストの顔は、迫害の下で無力なものになり、結局、日本人職人が作ったみすばらしく哀しそうなイメージに変化する。ロドリゴにおいてイエスの顔の変化は、イエスのイメージの変化といえよう。踏絵に足で踏もうとする時、銅板を見おろして、今まで思い浮かべてきたイエスの顔を思い出す。

主よ、長い長い間、私は数えきれぬほど、あなたの顔を考えました。特にこの日本に来てから幾十回、私はそうしたことでしょ。トモギの山に隠れている時、海を小船で渡った時、山中を放浪した時、あの牢舎での夜、あなたの祈られている顔を祈るたびに考え、あなたが祝福している顔を孤独なとき、思い出し、あなたが十字架を背負われた顔を捕らわれた日に甦らせ、そしてそのお顔は我が魂にふかく刻みこまれ、この世で最

33) 注11) の前掲書、175頁。

も美しいもの、最も高貴なものとなって私の心に生きていました。（『沈黙』267頁。）

宣教師ロドリゴが心の中で抱いているイエスの顔は、困難にある時には、慰めてくれる顔であった。それは作家が母を想い浮かべる時の顔と同様のものであると思われる。父母の離婚の後、様々な困難や挫折の中にあった時、母の優しさは慰めになったのであろう。絵踏みは、最も聖なると信じたもの、最も人間の理想と夢にみたものを踏むことである。

その時、踏むがいいと銅板のあの人は司祭に向かって言った。踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ。（『沈黙』268頁。）

クライマックスにあたる上の部分では、イエスのイメージが遠藤が触れたように、「神が人間の悪を裁き、罰し、怒る神から出来の悪い子供に対してそうでもあるように、神がそれを許し、人間と一緒に苦しむような宗教」³⁴⁾に変化する。キリスト教に対する作者の理解を端的に示すところである。イエスの顔の変化をもって、神のイメージの変化を象徴的に表している。沈黙を破って語りかけるのは、西欧キリスト教の神である「父の宗教」ではなく、「母の宗教」である日本人のキリスト像だということである。

笠井秋生は次のように述べている。

ロドリゴは、摩滅した踏絵のキリストの顔に接することによって、人間の苦しみや哀しみを共にわかち合う母性的なキリスト像を心にしっかり抱く

34) 注11) の前掲書、175頁。

ことができた。〈踏絵体験〉によってそのキリスト像への信頼をゆるぎないものにした。ロドリゴは作者の分身にほかならない。35)

遠藤は作品を通して、「父の宗教」を日本的な「母の宗教」へと転換させることを模索したといえよう。兼子盾夫が「キリストの顔とはキリスト教の象徴なのだ。」36)というように、遠藤におけるキリストの顔は彼の持っているキリストのイメージである。ロドリゴにおける雄々しいキリストの顔は、踏絵を踏む時に変わるが、それは作者が子供の時から一緒に暮らした優しい母のような神の顔である。遠藤は江藤淳の批評に対して、次のように述べている。

この主題を見抜いてくれたのは、江藤淳氏で、彼がその批評の中で「この踏絵のイエスの顔は、日本の母親の顔である。私は遠藤氏の母親に対する個人的経験については知らないが、しかしここに書かれた踏絵のイエスの顔の中には、遠藤氏と母親との関係が描かれている」ということを書いてくれたとき、私は長い間、自分が母親から着せられた洋服と、どのような戦いをしてきたかということが、この批評家によって見破られたなどと思った。37)

『沈黙』では、力強いイエスの顔が踏絵の前で上のように母親の顔に変化するが、『イエスの生涯』では、次のような聖書の引用を繰り返してイエスのイメージを描写している。

幸いなるかな 心貧しき人 天国は彼等のものなればなり

35) 笠井秋生『遠藤周作論』（双文出版社、1987）159頁。

36) 兼子盾夫「遠藤周作における文学と宗教—『沈黙』考察1—」『横浜女子短期大学研究紀要』（横浜女子短期大学、1999年3月）14、19、30頁。

37) 注11) の前掲書、175頁。

幸いなるかな 泣く人 彼等は慰めらるべければなり（『イエスの生涯』108頁。）

『イエスの生涯』に描かれているイエスのイメージ、すなわちイエスの顔は、『沈黙』のロドリゴが子供の時から自分の全ての夢や理想を託していた顔と同様なものである。それは、拷問にあった時でさえ美しさを失ってはいない、柔らかな、人の心の内側を見ぬく澄んだ眼がこちらをじっと見つめている、そのような顔である。

『沈黙』で「顔の変化の前」と「顔の変化の後」とによって、「父の宗教」と「母の宗教」とが対比的に示されているように、『イエスの生涯』では「洗礼ヨハネ」と「イエス」とによって、「父の宗教」と「母の宗教」とが対比的に示されている。

だがヨハネの抱く神のイメージは父親のイメージである。怒りと裁きと罰のイメージでもある。それは旧約にさまざまな形であらわれる峻厳仮借ない神であり。（『イエスの生涯』29頁。）

それはヨハネの抱いている神のイメージとはちがって、彼がガリラヤの湖畔の丘で人々に言い聞かせるやさしい母のような神の母胎となるものでもあった。（『イエスの生涯』30頁。）

上で見るように、遠藤はヨハネを「旧約の父親」のイメージとして、イエスを「新約の母親」のイメージとして捉えることによって、作者自身のイエス像をより明確に示していると思う。

『沈黙』において宣教師の使命感についてのロドリゴの認識の変化は、イエスのイメージの変化と類似していると思われる。ロドリゴは西欧のキリスト教を伝える

ために、殉教を覚悟し日本へ来た人物である。しかし、彼は日本人の信者を生かすために殉教を選択しない。それは、遠藤の考えていたイエス像が威厳のある西欧のイエスのイメージではなく、優しい日本のイエスのイメージであることによると思われる。

聖書には「汝等、全世界に往きて、凡ての被造物に福音をのべよ。信じ、洗せらるる人々は救われ、信ぜざる人は罪に定められん」（『聖書』マルコによる福音書16：15-16）とあるように、諸宣教師の使命は、イエスの福音を伝えることである。ロドリゴはカルペと共に使命感に燃えていた。彼等より先に日本へ渡った宣教師たちの役割を受け継ぐのが彼等の使命だった。

蒔いた種からこの悦ばしい芽がもう生えている以上、それを育てることが私とカルペの大きな使命となるのだと思いました。（『沈黙』39頁。）

ロドリゴは役人の山狩りのためカルペと別れて逃げる途中でも、「一人の司祭がまだこの日本に残っているということは、ちょうど、ローマのカタコンバに聖燭台の油灯が一つだけ燃えつづけている—それだけの意味はあるはずです」（『沈黙』94頁。）とローマ教会への手紙に書いている。人間がいかに強い信仰を持っていても、死への恐怖は自分の意志とは関係なく襲ってくるのである。しかし、ロドリゴは一人で逃げ回る苦しみの中でも絶望せず、カルペと生き残るために苦痛を耐え忍ぶ。ロドリゴには「芽がもう生えている以上、それを育てること」が使命であったので、彼は生き残らなければならなかったのである。

お前が消えてしまえば、日本から教会そのものが消えることになる。どんな屈辱や苦痛を忍んでもお前やカルペは生き残らねばならぬ。司祭は殉教するためにあるのではなく、このような迫害の時期には教会の炎を消

さぬためいき続けねばならぬのです。（『沈黙』112頁。）

上のロドリゴの言葉のように宣教師が生き残らない限り、福音を伝達することはできないのである。ロドリゴは意志を固くする。しかし、ロドリゴはキチジローの背教によって役人に捕まってからは、「司祭と言う誇りや義務の観念がなければ私もまたキチジローと同じように踏絵を踏んだかもしれぬ」（『沈黙』121頁。）と思い、弱くなる。人間は誰を問わず生命に関しては愛着がある。踏絵を踏んで生きたいという欲望があるのは自然であろう。ところで、ロドリゴはキチジローと同様な人間でありながら、司祭としての使命をも担わなければならなかった。

なぜ。そのなぜかと言う理由だけでも、教えて下さい。私たちはあなたが試練のために癩病にされたヨブのように強い人間ではない。ヨブは聖者ですが、信徒たちはまずしい弱い人間にすぎないではありませんか。試練にも耐える限度があります。それ以上の苦しみをもう与え下さいますな。司祭は祈ったが、海は冷たく、闇は頑なに沈黙を守り続けていた。（『沈黙』152頁。）

辛さにくたばれたロドリゴの苦痛は極限の状態に至り、初めは強い信念に支えられていた宣教師の使命感は弱くなっていく。ロドリゴは、自身が日本で役に立つ存在になっているというフェレイラの言い訳を聞いた時には、同情さえ覚えるようになる。

人々の為に有益であり役に立つことは聖職者たちのただ一つの願いであり夢だった。神父たちの孤独とは自分が他人のために無益である時だった。（『沈黙』226頁。）

上のようなロドリゴの使命感は変わっていく。ついにロドリゴは、他人の為に役に立つ人として、すなわち華々しく殉教した強者ではなく弱者として、今までの信念を捨てて、踏絵を踏むことに至る。ロドリゴがこのように変わったのは、背教が弱者であるゆえのことではないからであり、殉教を選択しなかったのは信徒を救援するためである。このように殉教を選択しないロドリゴを通じて、遠藤は同伴者の的なイエス像を示していると思われる。聖書のピリピ人への手紙2：7に「かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた」と記されているように、遠藤は「神の一人子が人間の姿になられて」という同伴者になった聖書のイエスを連想したのではないか。ロドリゴにおけるイエスの顔の変化や使命感の変化は、高橋英夫が説いているように、彼をキリストの位置にまで押し上げる。

『沈黙』という作品がいつまでに消えない感銘を保っているのは、おそらくそのことに発していた。セバスチャン・ロドリゴは、彼がそれを欲した否とにかかわりなく、神の恐ろしい沈黙に直面して、キリストの位置に来ていた。それはキリストがユダを包容したように、ロドリゴが彼のユダ・キチジローをも、やはり無意識に取り入れたことによってである。卑しきもの、弱きものも許されなければならない。³⁸⁾

ロドリゴは自身がイエスの位置に立って、卑しきもの、キチジローを弱きものとして包容するようになった。自身を背反したユダと他の十一人の弟子たちを許したイエスのように、ロドリゴも棄教者であるキチジローを許すのである。「主よ、彼らを許したまえ。彼等はそのなせることを知らざればなり」という十字架上の祈りのよう

38) 高橋英夫「遠藤周作—グローバルな認識—『沈黙』から—神とシンクレティズム—」『国文学』（学灯社、1993年9月）36頁。

に包容するのである。

遠藤は座談会で次のように述べている。

神は、われわれ人間の人生、人間そのものを通して、その存在を語り、どんなつまらない人生にも神はその証明をしているし、小説で書くと言うことは、神の存在の証明、神の沈黙と言葉を伝えるということになるんだと言う、キリスト教作家としての信念がわたしにある。ですから、（中略）背徳者を書いたとしても、神の存在というもの、神の声というものが何かの形ではいっていると思うのです。ロドリゴの生涯をずっと書いて来て、その転んだという人生そのものの中に神の言葉があるということを、私はどうしても一行加えたかったのです。39)

ロドリゴの認識の変化は、遠藤自身のキリスト観といえよう。遠藤は神の存在の証明の為に小説の中の宣教師になって、それに自身の信仰を投影したのだと思われる。

G・ネランはカトリックの信者である遠藤について、次のように述べている。

遠藤はすぐれた業績を為し遂げた。彼の作品を読んだ大勢の人々が、キリストの興味を抱くようになり、彼の影響により洗礼を受けた人も少なくない。遠藤は三十年間、日本でキリスト教の代表と認められた。彼はまた、第一線の宣教師であった。彼の洗礼名はパウロ。パウロ遠藤周作は、異邦人の使徒であるパウロの模範的弟子であったのである。40)

39) 森岡徹編「座談会—神の沈黙と人間の証言」『福音と世界』（新教出版社、1996）67頁。

40) G・ネラン「パウロの弟子パウロ遠藤周作」『遠藤周作の世界』（朝日出版社、1997）211頁。

遠藤は作品を通して、自身の代わりにロドリゴを日本へ派遣して自身の使命を遂行させ、自身のイエス像を作品に投影したと思われる。日本人の感性によって、信じることができる宗教を描いていると思う。柘植光彦は次のように述べている。

ところで「遠藤神学」の出発点は、西洋の神を東洋(日本)の、人間が信じるにはどうしたらいいか、という命題の設定にあった。これは遠藤周作の終生のテーマであって、最初期の『黄色い人』(55年)から最新作の『深い河』に至るまで一貫している。⁴¹⁾

遠藤にとって、どうしたら日本の人々が西洋の神を信じることができるのか、という命題は一生のテーマであった。つまり「父の宗教」から「母の宗教」への転換を模索したのである。

2. 2 フェレイラの背教と日本的風土

ロドリゴが『沈黙』の主題を明瞭に表している主人公であれば、フェレイラはその主題の背景を表す役割を担っているといえよう。フェレイラは背教後、再会したかつての教え子ロドリゴに対して自己正当性を唱え、心底からの述懐で自分の二十年に及ぶ苦しみの宣教を総括する。彼は日本人のキリスト教受容に当たっての変容・屈折の傾向を慨嘆する。⁴²⁾フェレイラは二十年の宣教の難しさを、ロドリゴに次のように語る。

41) 柘植光彦「イエス像—<遠藤神学>の円環が閉じる時」『国文学』(學燈社、1993年9月)77頁。

42) 兼子盾夫「象徴と暗喩でよみ解く遠藤文学の世界—『沈黙』の場合」『横浜女子大学研究紀要』(Vol.21)(横浜女子短期大学、2006年3月)57頁。

二十年、私はこの国に布教してきた。知ったことはただこの国にはお前や私たちの宗教は所詮、根をおろさぬということだけだ。この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと怖い沼地だった。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐り始める。葉が黄ばみかれていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった。（『沈黙』231頁。）

フェレイラが宣教師として日本で過ごした二十年は、遠藤が神の問題を初めてとりあげた『神々と神と』から『沈黙』に至る二十年間と一致している。その間、遠藤は「日本の精神風土と基督教との間に横たわる距離感を書くこと」に焦点をおいたと思われる。

『沈黙』においてフェレイラは、日本はどんな苗を植えてもその根を腐らせてしまう「怖い泥沼」で、宣教師達が伝えたキリスト教は日本では全く別の宗教に「屈折」してしまったという。フェレイラは、聖ザビエル師に教えられた「デウス」という言葉も日本人たちは勝手に「大日」と呼ぶ信仰に変えられ、陽を拝む日本人には「デウス」と「大日」とはほとんど似た発音だったという。

デウスと大日と混同した日本人はその時から我々の神を彼等流に屈折させ変化させ、そして別のものを作り上げ始めたのだ。言葉の混乱がなくなったあとも、この屈折と変化とはひそかに続けられ、お前がさっき口に出した布教がもっとも華やかな時でさえも日本人たちは基督教の神ではなく、彼等が屈折させたものを信じていたのだ。（『沈黙』234頁。）

フェレイラが語った通りに西欧のキリスト教は、言語の混乱だけでなく日本の風

土的特性によって屈折したのである。遠藤は、『沈黙』の背景となる当時における隠れ切支丹の屈折について、次のように述べている。

かくれ切支丹の信仰は祖父や父の信仰とは本質的に違う。日本人には特有の祖先愛着や、部落単位や、共犯者意識というこの三つの心理があった。かつてザビエルは、日本人たちは自分が切支丹に入れば祖先を見棄てることになると言って嘆き悲しみ、その祖先愛着が入信の妨げとなることを嘆じたことがあったが、今度はその祖先愛着が逆にかくれ切支丹の信仰を持続させたのだった。部落単位に役職を作って部落での洗礼式や告解や祈りを次の世代に教えていったのだったし、信仰を守らねばならぬ時は部落全体が結束した。⁴³⁾

上のような様相は、『沈黙』のロドリゴが日本へ潜入して布教をする過程でも見られる。日本的な心理は個人の問題ではなく、日本という共同体で表される伝統や文化、意識という点で受け入れられるのである。遠藤は、本質的なものから屈折と変化が生じたと述べているのである。それなら、屈折と変化をもたらした原因は何なのか。

まず、遠藤は「基督教と相容れない日本人の感覚と、神に対する無感覚、罪に対する無感覚、死に対する無感覚」⁴⁴⁾のようなところに原因を求めている。また、次のように日本人の汎神的感性に原因があるとしている。

和辻博士はその名著『風土』の中で西欧の感性を砂漠的となづけ、ぼくらのそれを湿雨的となづけられたが、つまりすべての物の境界をあいまいにぼやかせてしまう湿雨のように、ぼくらの感性は本質的に明確なも

43) 注17) の前掲書、373頁。

44) 注18) の前掲書、307頁。

の、非情なもの、実体をむきだしにすることをきらうのであり、(中略)われわれの道徳や生活をも全く支配してきたのである。一言で言えば、人間と自然の対立と区別とを拒む汎神的感性なのである。45)

遠藤が指摘している汎神的感性は、フェレイラの姿を通してよく表されていると思われる。フェレイラは、「日本人は人間とは全く融絶した神を考える能力を持っていないし、人間を越えた存在を考える力も持っていない。」(『沈黙』236頁。)と語る。さらに、日本人における神の概念についても「人間を美化したり誇張したものを神と呼び、人間と同じ存在を持つものを神と呼ぶ」(『沈黙』236頁。)という。作者は、フェレイラの述懐を通して、日本人には西欧の基督教に相反する感覚があることを主張している。

遠藤は、「他の国に生まれたのではなく、基督教の伝統も文化も歴史も全くなかった日本に生まれたので、彼の心の中にはこの基督教に浸されていないものの、むしろ基督教とは相反する感覚が隠されていたことを青年時代になって気づいた」46)と述べている。

遠藤は西欧の基督教を「体に合わない洋服」と表現した。しかし、「体に合わない洋服」を捨てたのではなく、「『沼地』日本に痛恨と断念をもって立ち止まるのではなく、それを越えていく基督教受容の可能性を模索した。」47)と細川正義は説いている。

松浦勝男も『沈黙』について、「屈折してしまったこの基督教の形骸化は日本社会の中に『人間を越える存在』の概念が欠落していることが原因であると分析し、栄光ある殉教に憧れるロドリゴを甚だしく動揺させて、日本の精神風土と基督教との間に横たわる距離感を描いている」48)と説いている。

45) 注16) の前掲書、207頁。

46) 注18) の前掲書、305頁。

47) 注1) の前掲書、3頁。

48) 松浦勝男「遠藤周作に見る「文化受容ー基督教的价值とその土着化について」『比較

日本に西欧文学・文化と不離の関係にあるキリスト教思想が流入されるが、近代になってもキリスト教は土着化されない。

先述したように「現在、日本人の中でキリスト教の信者の数はカトリックとプロテスタントを合わせても国民の一パーセント弱しかない」⁴⁹⁾ということを見ても、「キリスト教が育ちにくい風土」という遠藤の指摘は頷かれる。このような日本的な風土の中で遠藤は、カトリック作家としての義務感を持っていたのではないかと思われる。

この神のひそかな痕跡をカトリック作家は発見せねばならぬ。その時彼は、ある愛の抑制に動かされて、作中人物の魂の深淵をあばくに忍びなくなってくるといっています。何故なら一般作家にとっては、作中人物はただ心理探究の対象であります。カトリック作家にとっては「彼等作中人物が心理的に生きている」だけでは充分ではなく、彼等が永遠性に生きる事、すなわち「作中人物の各々が救われるだろうか。それとも永遠の地獄に呑み込まれるか」が問題になるからです。⁵⁰⁾

遠藤は、作中人物の心理探究だけではなく、「救援の問題」を深く掘り下げるカトリック作家であった。これは、作中人物の性格を通して、遠藤のキリスト観をうかがえる根拠となると思われる。

遠藤は、フェレイラの背教を通じて日本の宗教的な感性を指摘し、主人公であるロドリゴを通じてカトリック作家の義務感を表出したのではないかと思われる。汎神的な風土で育ち、フランス留学を経験した遠藤にとって西欧のキリスト教と日本のキリスト教との間には、越えられない文化的な差異、観念の差異があっ

文明』（通号16）（比較文明学会編、2000年）215頁。

49) 注1) の前掲書、3頁。

50) 遠藤周作「カトリック作家の問題」『遠藤周作全集12』（新潮社、2000）27頁。

たはずだ。人間は自身が属している空間で経験した事を連想し、考えざるを得ない存在である。それらが体に合わない洋服だったため、苦痛の深淵の中で自身だけの和服に変えようとしたのではないか。

『沈黙』におけるロドリゴとキチジローの関係は、聖書の中のイエスとユダのように見られ、これらには遠藤のキリスト観が反映されていると思われる。

2. 3 キチジローにおける背教と救援

『沈黙』においてキチジローは弱者の典型であるといえよう。キチジローは宣教師たちを日本へ案内するが、弱さゆえに裁きを恐れて踏絵を踏み、ついに村にいたことができなくなって、外国へ逃げ出してしまふ。澳門をさまよっている時に宣教師に出会い、彼らを日本につれて帰る。それによって彼は突然、村人に英雄扱いにされる。しかし、彼は恐怖に耐えず、繰り返し転ぶ卑怯な人であり、人間の弱さや卑劣さ、狡猾さを一身に体現したような人物である。物語の中で主人公にも劣らない役割を担っているキチジローを、遠藤は聖書のユダと対比させている。それでは、遠藤はユダに対してどのように考えているのか。遠藤はユダの役割について、次のように書いている。

十二使徒のなかで端役ではないし、福音書のなかでもたとえば聖ヨハネなどは彼を極端に嫌悪と憎悪をもって無視しようとしているが、しかしユダの演じた役割は基督の生涯という劇の中で最も大きな傍役となっているし、基督の大きな運命の輪を閉じるために欠くべからざる人間だった。⁵¹⁾

ユダは、「最後の晩餐」で、裏切りの接吻を行う役を与えられた。最後の

51) 遠藤周作「ユダと小説」『遠藤周作全集12』(新潮社、2000)297頁。

晩餐の以前にも一度、ベタニヤでシモンの家で食事の席に着いておられるイエスの足に香油を注ぎかけた一人の女に「何のために香油を斯は費したるぞ。香油は三百デナリオ以上売りと貧者に施しえたりしものを」と言ったことがある。この聖書の例え話は『イエスの生涯』からも出てくる。マリヤの無私で謙虚な行為を、ユダは浪費であると非難する。イエスは、マリヤがなしたことを、イエスの葬りのための行為として評価するが、ユダはそれを理解しないし、「これだけの高い油なら三百デナリオで売り、その金をみじめな者に施したほうがいい」という。この言葉について遠藤は、ユダに現実の効果性のほうが大事だという気持ちがあったという。しかし、遠藤は、十二使徒の中、信頼できる人として会計を預かったユダが、銀三十枚という僅かな金額で師を見捨てたというのは単純な心理ではないと指摘する。

私のような小説家はユダがイエスを売った銀三十枚という僅かな金額に非常に関心をもつ。ユダは多くの仲間が師を見捨てて脱落していった後も十一人の他の弟子と苦しいイエスの旅に最後まで従った一人である。その彼がわずか三十枚の金で師を売ったのは単純な心理ではない。彼は師を愛しながら憎愛と自分を苛める心理がはっきりと出ている。⁵²⁾

ユダは銀三十枚という僅かな金額で師をなぜ裏切っただろうか。ユダは十二使徒の中では、イエスと共にユダ族、つまりダビデの部族に属しているただひとりの使徒であった。この点で、彼はイエスにこと近い弟子であった。⁵³⁾ユダは、イエスが自ら選んだ弟子であった。自ら選んだ弟子が、イエスの裏切り者である。本多峰子はバルトの論考を引いて、「『裏切る』という言葉は元々『引き

52) 遠藤周作「私の『イエスの生涯』」『遠藤周作全集13』(新潮社、2000)170頁。

53) 本多峰子「ユダは救われるか—『イスカリオテのユダ』と遠藤周作『沈黙』による考察」『国際政経論集』(第11号)(二松学舎大学、2005年3月)80頁。

渡す』というほどの意味で通常使われる語だ」54)とし、「この引き渡しによって、イエスとその業を完成するためにし給わなければならなかった決定的なこと一、彼の苦しみと死が始まったのである」55)と述べている。

バルトはユダの引き渡しについて、次のように説いている。

十二使徒自身が、ひとつに、しかも決定的な箇所、イスラエルと共に、また、異邦人世界と共に、イエスに対して、過ちを犯さなければならない。それは、まさにその結果、イエスが十二使徒とイスラエルと世に相対して、神の意志をなしとげ給うようになるためである。この、神の御旨の中で必然的なものとして決定された引き渡しの特別な要因および代表指数が、使徒、イスカリオテのユダである。56)

バルトは上のように、ユダの行為が世に救援のために不可欠であったと説き、彼が神の意志を為し遂げる必然的な人物であると主張している。遠藤は聖書とは違う観点で、この必然的な人物とされるユダをキチジローと同一視している。キチジローは、繰り返し「弱い者」として描かれている。キチジローに裏切られ獄に入れられたロドリゴは、イエスがユダに言った言葉「去れ、行って汝のなすことをなせ」を嘔みしめている。遠藤は、転び者ゆえに教会でも語ることを好まず、歴史からも抹殺された人間であるユダを、『沈黙』でキチジローに再び生き返らせ、そして自分の心情をそこに投影したのである。このような点について、石内徹は次のように述べている。

殉教した者は、強者である。とすれば、棄教者は、誇りを踏み躪ら

54) 注53) の上掲書80頁。

55) 注53) の上掲書80頁。再引用。

56) 注53) の上掲書80頁。再引用。

れたみじめな弱者であろう。その弱者は、志を貫くこともできず、やむをえず節を屈した者である。屈辱のうちに歴史の闇の中に埋もれた者である。作者は、それらの人々の心の傷みに思いを馳せ、照明をあてて、歴史の闇から復権させようとしている。⁵⁷⁾

物語の展開の上で、ロドリゴにとってキチジローは、必ず設けなければならない存在である。遠藤にとって『沈黙』は、自分の切実な問いに対する答えを自ら見出した作品だったと思われる。

以上のように、『沈黙』でキーワードとなる三人の人物を通して、イエスのイメージの変化や日本のキリスト教が根をおろさぬ風土、キチジローとユダの関係および機能について考えてみた。

57) 石内徹「遠藤周作『沈黙』論」『清和女子短期大学寄紀要』（巻号30）（清和女子短期大学部、2002年1月）80頁。

3. 『イエスの生涯』におけるイエス像

『沈黙』の発表7年後に書いた『イエスの生涯』では、遠藤のイエス像が作者自身の言葉で更に明確に描かれている。イエスの評伝『イエス・キリスト』には『イエスの生涯』『キリストの誕生』の二作品が併載されている。遠藤はその「あとがき」で、次のように述べている。

何よりも私が日本人であり、私の読者が日本人の読者だからだ。日本人の私ができる「イエスの生涯」でなければ、日本人の読者の共感をえないと私は長いこと考えていた。(中略) 聖書をよみ、基督教を考えるたびに私はそこに日本人にも親しめるイエスのイメージを発見した。そしてそのイエスこそ「私のイエス」となった。⁵⁸⁾

日本人の読者を念頭に置いて書いた『イエスの生涯』は、一九七三年、新約聖書の福音書を元にイエスの評伝として書かれた作品で、構成やイエス像の造形において、シュダウファーの「イエス-その人と歴史-」の影響を受けている。ヨハネ福音書の流れに即してイエスの一生の流れを設定している点、イエスのヨルダン川の受洗から刑死にいたるまでの期間を四年半としている点、聖書には記されていない年号を作中で記している点などによって、「イエス-その人と歴史-」と一致していることが指摘されている。⁵⁹⁾

遠藤は、すでに『沈黙』でロドリゴを通じて同伴者としてのイエスを示しており、『イエスの生涯』では聖書とは違う、神性よりも人性を備えたイエスを描いている。それに、「奇蹟物語」の代わりに「慰めの物語」を通じて、怖ろしい神

58) 宮野光男「遠藤周作の作品を読むー<イエス・キリスト>」『国文学』(学灯社、1993年9月) 116頁。再引用。

59) 注9) の前掲書、51頁。

ではなく同伴者イエスを描いている。また、聖書に初めて接した日本人を意識して、(『イエスの生涯』206、220頁。)「事実」というより「真実」という言葉を使うことで拒否感を減らしている。「信仰は、望んでいる事がらを確認し、まだ見えていない事実を確認する事である」というヘブル人への手紙11:1のように、見えていないことを信仰して信じるのが大切であると述べている。これは、日本的な感性に合うものを探索し、苦悩してきたカトリック作家が追い求めたイエス像ではないかと思われる。

3. 1 無力と無能

遠藤は『イエスの生涯』で、イエスを全能な神の一人子として描いているのではなく、「無力」と「無能」な人間として描いている。『イエスの生涯』の中で、「無力」「無能」ということばは、二つの意味で用いられている。まず、「無力」は、辞典的な意味である「力のないこと、努力のないこと、貧しくなること、貧乏」などと捉えられる。「無能」は、「能力のないこと、才能のないこと、役に立たないこと」⁶⁰⁾という意で用いられる。しかし、大事なことはこの二つの言葉が辞典的な意味だけでは捉えられない点である。宗教観を表わすために、意図的に用いていることに注目すべきである。

『イエスの生涯』において、民衆たちが見ているイエスは、「無力」「無能」な存在である。ユダヤ人は、長い間、預言者が現われるのを待望していた。ユダヤ人に到来する力強い「救い主」への期待があったのである。しかし、このような期待は挫折された。奇蹟を願う民衆にイエスは「無力」で「無能」な存在でしかなかったのである。

『イエスの生涯』において「無力」や「無能」という言葉は、「責任、能

60) 広辞苑による。

力のない者」「何もできぬ男」「役に立たぬ男」などを含めて七〇回以上も用いられている。それに、「何の力も能力も持っていない」「役に立つことができないもの」という表現は「主よ、み手に委ねたてまつる」パートには、四〇回以上も出てくる。『イエスの生涯』ではまず、イエスは「無力」「無能」な存在として描かれる。

では、聖書の中で描かれているイエスは、どのような存在であったのか。イエスの誕生について、次のように記されている。

見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。御使いが答えて言った、「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生まれ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう。」(『聖書』ルカによる福音書 1:31、35)

ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月がみちて、初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中にねかせた。客間には彼らがいる余地がなかったからである。(『聖書』ルカによる福音書 2 : 6 - 7)

聖なる神の子が飼葉おけの中にねかせてある。飼葉おけは、牛馬の餌を入れる樽であるが、このようなところで誕生したイエスは貧乏な出身であり、「無力」「無能」な存在そのものである。

しかし、聖書はイエスを「無力」「無能」とは記していない。イエスは、人間として生まれた神の子であるものの、自らを卑下する存在である。さらに飼葉おけにねかせたというのは、卑下の極限を示すことであると思われる。「飼葉おけとは神の子であるイエスの謙遜と苦難を象徴する」⁶¹⁾といえよう。そして、ヨハネに

よる福音書1:29でも「世の罪を取り除く神の小羊」と記している。神の小羊というのは、尊い存在に対する謙遜の意味であると思われる。

聖書の中でイエスの謙遜は、遠藤の文学において、強者と反対の概念である弱者の意味として捉えられる。高橋英夫は、次のように述べている。

弱者ということであれば、何とんでも代表は「弱者イエス」にちがいない。こうして、様々な弱者たちが弱きイエスに対応するとか、弱きイエスの人間的置き換えとして出沒するとかを通じて、文学の構図、ストーリー、展開が用意されていったものであろう。⁶²⁾

遠藤は『イエスの生涯』で、人間的置き換えとしての弱者イエスを「無力」「無能」ということばで表現したと思われる。宮野光男は、「無力」に関して、次のように述べている。

神の子イエスを表現しようとしている遠藤にとってどのような方法があるというのであろう。遠藤が採用した方法は、徹底的に「無力なイエス」を描くことであった。それはたしかに＜大胆な推測＞と言わなくてはならない、遠藤独自の解釈-あえて言えば文学者であるゆえに許される一種の冒険でもある-がそこにはある。⁶³⁾

聖書でみられる謙遜なイエスは、文学者である遠藤によって「無力なイエス」として描かれたといえよう。これは、辞典的な意味としての「無力」ではない。

しかし、奇蹟を願う民衆たちにイエスの「愛」は「無力」なものにすぎない。イ

61) 강병도編『호크마성경주석』(기독교지혜사, 1990)신약3권-눅2:7, 79頁。

62) 高橋英夫「遠藤文学における弱者と母」『遠藤周作の世界』(朝日出版社、1997)129頁。

63) 宮野光男「遠藤周作の作品を読む-＜イエス・キリスト＞」『国文学』(学灯社、1993年9月)117頁。

イエスは、彼等には現実的に「無力」な男であった。この点について川島秀一は、次のように述べている。

イエスから離反しはじめる民衆の心理を線密の読み解いていく。その愛は、<現実には無力>だから。愛とは<現実には直接に役立たない>から。結果、イエスは「無力な男」「結局はなににもできぬ男」という新たなイメージが民衆の中に植えつけられたのだ。64)

民衆が見ているイエスの「無力」と違って、遠藤は、この「無力」に基督教の秘儀が匿されていることを述べている。

だが我々は知っている。このイエスの何もできないこと、無力であるという点に本当の基督教の秘儀が匿されていることを。そしてやがて触れねばならぬ「復活」の意味もこの「何もできぬこと」「無力であること」をぬきにしては考えられぬことを。そして基督者になるということはこの地上で「無力であること」に自分を賭けることから始まるのであるということ。 (『イエスの生涯』205頁。)

「無力」という言葉に匿されている基督教の秘儀とは何か。それは「愛」である。遠藤は、現実における「愛」が民衆には結局「無力」であるということとを説いている。

現実における愛の無力さということである。彼はそれら不幸な人間たちを愛されたが、同時にこれらの男女が愛の無力さを知ったとき、自分を裏

64) 川島秀一「遠藤周作『イエスの生涯』<事実>と<真実>の間—イエスの原像を求めて」『山梨英知短期大学国文学会』(Vol.30)(山梨英知短期大学、1998年2月)6頁。

切ることも知っておられた。なぜなら人間は現実世界では結局、効果を求めるからである。（『イエスの生涯』68頁。）

「無力」をめぐる、高橋英夫は、弱者と母のイメージとを重ねて、「母と弱者は、根本的に矛盾をはらんだ存在であり、論理的に整合された概念ではなく、現実的には無力である」⁶⁵⁾と述べている。遠藤にとって弱者の概念は、母と同様なものであるといえよう。本多峰子は、遠藤の神は母のような神であると指摘している。

キリスト教では、神は〈三位一体〉である言うが、それは、父と子と聖霊からなり、父なる神は人間の原罪をただ無償で許すことを正義とせず、その罪を購うために自分の御子をキリストとしてこの世に遣わし、十字架の血を流したのである。その血によって人間の原罪が購われ、今日生きているわれわれの本質的な罪深さも許されているのだと、キリスト教徒は考えている。しかし、遠藤の神はそのような厳格な正義の神ではない。ひたすら優しい母のような神である。⁶⁶⁾

本多峰子が説いているように、『イエスの生涯』は聖書をそのまま写して伝えるものではない。遠藤は、『イエスの生涯』で、イエスが十字架で血を流すことによって人間の原罪が購われ、許されるというキリスト教の教理をそのまま伝えるのではなく、優しい母のような「無力」で「無能」なイエスを描いているのである。「無力」や「無能」という表現を使ったのは、イエスが神の子であるにもかかわらず十字架で「無力」な姿で死ぬことによって、愛のシンボルそのものに

65) 注62) の前掲書、129頁。

66) 本多峰子「遠藤周作試論〈母なる神—西洋キリスト教と日本人の宗教観の相克と、宗教多元論的解決〉」『二松学舎大学東洋学研究所集刊』（Vol.31）（二松学舎大学、2001年3月）55頁。

なった（『イエスの生涯』205頁。）からである。遠藤は、民衆がいう「無力」と、神の「無力」とを対比させている。民衆の「無力」は、神の「無力」とは完全に違う意味を持っているからである。

人間の無力と神(イエス)の無力とは対応してはいるが、しかし人間の痛みに対応しているのは神に痛みだけではなく、痛み以上の何かものか、敢えて言えば神の愛であるということである。それが神における重層性なのである。ただ人間と同じように弱い、同じレベルで弱者であるだけの神をどうして人間が信仰できるだろうか。信仰は神が人間を超越した本質を含んでいるからである。それが外見上は神の痛み、神の弱さとして示された神の愛である。この愛が、無力のままに最大の力たりうるという秘儀的逆説が心に届かないならば、そもそも信仰は成立しない。神あるいはイエスが弱さを内にもつか、又は人々に弱さを分割分有させたのは、神という原型が本来持っていた両義性-生と死、栄光と悲惨-の地上的な形であり、また小説的な構成である。⁶⁷⁾

上で高橋英夫が説いているように、遠藤は、イエスを「無力」な存在として描くことによって、逆説的に神の愛の偉大さを描いたといえよう。

人間のために自分の命をすてるほど大きな愛はない。それこそが人々に無力にみえようとも、神の最後の存在証明なのだ。（『イエスの生涯』117頁。）

「無力」や「無能」という表現は、神の愛を極大化して表すために用いられた表現であると思えることができよう。遠藤は、「無力」にみえるイエスの愛こそ

67) 注62) の前掲書、129頁。

神の存在証明であると感得している。遠藤が描いている神の子イエスの「無力」は、逆に人間の「無力」を抱いている神の強い愛を象徴しているのではないかと思われる。

3. 2 事実と真実

遠藤は、「無力」や「無能」という言葉を用いて象徴的に「愛」の意味を強調するのと同様に、聖書における「慰めの物語」は「事実」であるとし、「奇蹟物語」を「真実」であると説く。

「事実」の辞典的な意味は、「時間・空間内に見出される実在的な出来事、または存在として実在的なものであるから幻想・虚構・可能性と対立する概念」であり、「真実」は「嘘や偽りでない本当のこと」⁶⁸⁾である。しかし、遠藤が説いている「事実」や「真実」という言葉は、辞典的な意味だけでは理解できないと思う。「事実」や「真実」という言葉に託されている意味が何であるのかを、作家の意図に照らし合わせて考察する必要があるだろう。

遠藤は、『イエスの生涯』の四番目のパートである「ガリラヤの春」で「事実」と「真実」について言及している。彼は、聖書が「イエスの生涯」を「事実」通りに記していないと指摘し、カトリック側もプロテスタント側もその点を等しく認めていると説いている。伝承されてきたイエス民話をあたかも「事実」のように書いたのだと主張する学者もいることを付け加えている。

遠藤は、イエスにまつわる聖書の中の物語を二通りに分け、「事実」または「真実」のものとして説明している。一つは、イエスが病気を奇蹟のように治したという所謂「奇蹟物語」であり、もう一つは、奇蹟を行わずに民衆のみじめな苦しみを分かちあう「慰めの物語」である。

68) 広辞苑による。

まず、『イエスの生涯』の中には、二つの「慰めの物語」が紹介されている。一つは、聖書のルカ福音書7：36であるが、遠藤のエッセイ「私の『イエスの生涯』」でも同じ例話の内容が紹介されている。

人々にさげすまれた娼婦がその人生の哀しさに耐えかねて、イエスの前で涙をながす。その娼婦にイエスが、もう、いいのだ、もう、いいのだと答えられる。あなたは多く愛した。多く愛したから多く許されるのだと言われる。69)

もう一つは、マルコの福音書5：25である。

長い病気でくるしんでいる女が群衆の愛だからおずおずとイエスの衣に指をふれる。その指からイエスは彼女のながい苦しみを感ずる。70)

聖書の中には、数多の例話が出てくるが、遠藤はなぜこのような二つの例話を選択したのか。遠藤は、奇蹟で治されたという結末よりも、彼女の切れない苦しみのすべてをイエスが感じとったこと（『イエスの生涯』64頁。）に注目したのである。

聖書に伝われる上の二つの例話には共通点がある。それは、「信じる」ということと、対象がかわいそうな娼婦、病者、やもめ、みなしごなどということである。罪を犯した一人の女や長血を患う女の病気が治された後、イエスは「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心していきなさい」（『聖書』ルカ福音書7：50）と語っている。

遠藤は、聖書に記されている「信仰」に対して直接的に触れずに、イエスの

69) 注52) の前掲書、168頁。

70) 注52) の前掲書、168頁。

「愛」だけに注目している。

福音書のそういった「慰めの物語」のほうが、数多くの「奇蹟物語」よりもはるかにリアリティがあり、イエスの姿をいきいきと感じさせるのは、そこにこそ本当の彼があったからなのだろう。極言すればイエスは愛を実践したが、奇蹟など行わなかったのである。71)

上のように遠藤は、事実のイエスを「愛」の実践者として描いているが、「奇蹟物語」を否定しているのではない。遠藤は、創作されたとみられる「奇蹟物語」をイエスの死後、イエスの弟子たちが作った物語だと見ている。しかし、彼はそれを嘘や偽りだとはいわない。「真実」だと説いているのである。

遠藤のいう「真実」を「信仰」に置き換えてみると、「人間の条件は事実や実際だけでは規定されぬ、大事なことは人間の魂が欲した真実の世界である」(『イエスの生涯』254頁。)ということになるだろう。

聖書における信仰とは「望んでいる事柄を確信し、まだ見えない事実を確認すること」(『聖書』ヘブル人への手紙11:1)である。

事実でなかった場面もそれがイエスを信仰する者の信仰遺産である以上、真実なのだ。それは事実などと言う枝葉末節のことははるかに越えて、その時代の信仰者がそれを心の底から欲した場面であるから、真実なものである。(『イエスの生涯』147頁。)

遠藤は、「真実」その自体が「信仰」であると説いているのである。しかし、「事実でなかった」という解釈は、「事実性を否定した」と、聖書を「信

71) 注52) の前掲書、168頁。

仰」する立場にあるカトリック教会の反発を買う。遠藤は、答えとして次のように説いている。

聖書は原始キリスト教団によって書かれ、後に聖書が出来、その中にアクセサリーを追加したと言っている。しかし、それらが事実でないことから否定していないし、現代の人間の条件と言うのが、事実ということしか肯定しないことだとしても、事実以上に真実として積極的に認めようと言う立場を取っているのである。⁷²⁾

また、奇蹟というものを認めないという立場に対するカトリック教会の反発には、次のように答えている。

奇蹟というのは信仰の上で、大して重要な問題じゃないという気がしておるわけです。(中略)しかし、奇蹟だけでは信仰は成立しないし、宗教の中に奇跡と言うものを求めたいという人間的な希求と言うのは分かるが、イエスはもっと別のことを皆に伝えたかったのではないかと思う。⁷³⁾

このように、遠藤は「事実」である「慰め物語」を通じて人間的なイエス像を描き、「真実」である「奇蹟物語」を通じて聖書を否定しない作家的認識を確かにしたといえよう。

3. 3 洗礼ヨハネとイエス

遠藤は、『イエスの生涯』で「無力」であり「無能」なイエス像を描いて、

72) 小瀧昭夫「わが思索のあと」『遠藤周作の世界』（朝日新聞社、1997）146頁。

73) 注72) の前掲書、148頁。

十字架の愛を強調し、「事実」や「真実」の意味を探っている。また、遠藤は洗礼ヨハネを旧約の「父なる神」とし、イエスを新約の「母なる神」として表現した。「母なる神」は彼の作品における主要なテーマである。

まず、イエスが活動した時代をみると、ユダヤ人は長い間異邦人たちに支配された。それによる屈辱感、失意と絶望の中で頼りにしてきた民族的な神ヤハウェが「送ってくれる」という「救援の主」を待望する気持ちを持たせたのである。ユダヤ人は五百数十年の外国の支配下にありながら、ヤハウェがいつか、かつてのダビデ王のような民族的な「救い主」を送り、ユダヤ国土と誇りとを取り戻してくれるという希望を持っていた。このような民族的な「救い主」を待ち望んでいた時にヨハネとイエスの登場は、意味深いことであったといえよう。

遠藤は『イエスの生涯』で、聖書の中では具体的に記されない時代的狀況を説明しながら、ヨハネを「旧約の父」とし、イエスを「新約の母」として両者を比較している。

彼がユダの荒野で仰いだ星々も氷のようにつめたく、生きるものの何ひとつない死海とその背後の山々は怒る神、罰する神、裁く神しか暗示していなかった。旧約の世界が抱きつづけたこのあまりに厳格な父なる神のイメージ。それを受けついでいる洗者ヨハネと彼の教団。そのなかでイエスは彼等に欠けているものをいち早く見抜いておられた。（『イエスの生涯』56頁。）

遠藤は上のように、「洗礼ヨハネ」を旧約の厳格な「父なる神」のイメージで表現し、「そのなかでイエスは彼等に欠けているものを見抜いている」と語って、イエスに対しては別のイメージを設定している。

聖書の「ヨハネ1:6―8」には、ヨハネが次のように表されている。

ここに一人の人があって、神から使わされていた。その名をヨハネといった。この人は証のために来た。光についてあかしをし、彼によってすべての人が信じるためである。彼は光りでなく、ただ、光りについてあかしをするために来たのである。（『聖書』ヨハネ1:6-8）

聖書の中でヨハネは、イエスを証するために来た「証拠者」であると記されているが、遠藤は聖書を引用しながらも、ヨハネを裁き者として描いている。

荒野に呼ばわる者の声ありて曰く。汝等、主の道をそなえ、その径を直癖よ。イザヤ書の通り、蝗のすえよ。来るべき神の怒りを逃ることを誰か汝等におしえしぞ。既に斧は根におかれたり。すべて善き果を結ばざる樹は切られて火に投げ入れらるべし。（『聖書』マタイ福音書3:3、7、10）

「神の国の出現する日が近い」というヨハネの裁きの叫びは実に怖ろしく聞える。遠藤は、次のように、ヨハネのイメージを描いている。

ヨハネの抱く神のイメージは怒りと裁きと罰の父親のイメージである。それは旧約にさまざまな形であらわれる峻厳仮差ない神であり、おのれに従わぬ町を亡ぼし、民の不正に烈しく怒り、人間たちの裏切りを容赦なく罰する厳父のような神である。（『イエスの生涯』29頁。）

ヨハネのイメージは父親のそれである。しかし、イエスは母のような神のイメージとして捉えられている。

神が父のようにきびしい存在ではなく、母のように苦しみをわかちあう方

だと信じておられたイエスは、その神の愛を証するためにガリラヤの湖畔で不幸なる人々に会うたびに、それらの人間が神の国では次のようになることを願われたのだ。（『イエスの生涯』108頁。）

遠藤は、自分が考えている神の「愛」を他の「愛」と比較するときに、その比較の対象として彼の母親を思い浮かべたのである。聖書では「天にいますわれらの父よ」（『聖書』マタイ福音書6：9）と、神を父と記しているが、それは父そのものの意味を越えた象徴性を持つ表現であると思われる。

遠藤は、ヨハネのイメージである怖ろしい神の存在する旧約時代が終わり、イエスによって新約の時代が始まったと捉えている。

私たちは暗い宿命を背負った旧約の世界が遂に終わったという感じにとらえられる。長い長い夜があけ、しののめの光がさし込んだという印象もうける。（『イエスの生涯』58頁。）

「夜があけ、しののめの光がさし込んだ」という表現で、新約のイエスの時代が始まったことを示している。そのような新しい時代の主であるイエスを、遠藤は母のような同伴者として捉えている。

人間は永遠の同伴者を必要としていることをイエスは知っておられた。自分の悲しみや苦しみをわかち合い、共に涙をながしてくれる母のような同伴者を必要としている。神が父のようにきびしい存在ではなく、母のように苦しみをわかちあう方だと信じておられた。（『イエスの生涯』108頁。）

同伴者イエスは、遠藤において母親のようなイエスである。遠藤は母親につい

て、次のように書いている。

私にとって母というのは、単に尊敬すべき人というのではなく、もっとも人間らしい生き方をした人物ということを感じると同時に、自身の肌の一部のように感じられる。（中略）私がこんな年齢になっても母を怖いと思うのは、私が母を良心の一つの規準にしているからだろう。74)

遠藤において母の存在は、良心の一つの規準であり、「信仰」のような存在である。遠藤は、距離感のない母親のような神を強調している。「罰する神」「愛する神」といった問題をめぐって、村松剛は遠藤の証言を、次のように伝えている。

昭和二十九年ころから、遠藤は、＜日本ではキリスト教という明治以後流入した清教徒思想のイメージがつよく、したがってきびしい父なる神、罰する神のほうが強調されすぎる＞、＜キリスト教の神は、たんに罰する神ではない＞、＜愛する神、許す神こそが、大切なのだ＞と繰り返して語っていたという。75)

遠藤は、内村鑑三が清教徒思想によって、「愛の神」より「罰する神」に注目したことに問題を提起したのである。

「日本にキリスト教が根づくためには、父性的ないかめしい旧約の神ではなく、新約聖書の母性的なキリストを強調して差し出すことが必要である」76)という遠藤の言葉にみるごとく、遠藤は日本人に合う「母性的なイメージのキリスト」

74) 注26) の前掲書、393頁。

75) 笠井秋生『遠藤周作論』（双文社出版、1987）159頁。

76) 山根道公『遠藤周作その人生と『沈黙』の真実』（朝文社、2005）411頁。

を追い求めたのである。ここに遠藤のキリスト観がうかがわれるといえよう。

4. 『沈黙』と『イエスの生涯』における受難と救援

『沈黙』と『イエスの生涯』では共通的に裏切り、受難、救援という言葉が多く用いられている。裏切りという言葉は、約束・信義に反する行為をするという意味で、期待に反することである。『沈黙』と『イエスの生涯』では、裏切りが原因になって、主人公は受難を受けるようになる。受難は苦難であり、苦難は痛みである。

藤本武は原始キリスト教の共同体における「痛み」に関して、次のように述べている。

「挫折」や「苦難」や「病気」などの「痛み」は、パウロの意識においては自我の消滅と捉えられ、「痛み」の超克後、それらの「痛み」は自己の実存におけるキリストの生命への明け渡しとしての真理への認識の到達する道である。（中略）「痛み」とは困窮に満ちた現在、栄光に満ちた未来」という規範的命題に従う相対的出来事とも理解されている。「痛み」とは「キリストの受難」として理解されている。

「キリストの受難」とは、キリストとの交わりへと受け入れられること、である。77)

藤本武は、また「痛み」は「自己の人生確立のための勇気ある闘争への要請であり、隠蔽された救済を象徴する『未遂』であると理解されている」78)と説いている。

このような意味によると、『沈黙』と『イエスの生涯』における受難は、救援

77) 藤本武「『痛み』の定義とその発生に関する比較文明論的考察—神教、仏教、日本、医学的領域における」『新潟青陵大学紀要』（新潟青陵大学、2005年3月）176頁。

78) 注77)の上掲書、176頁。

のために、必ず経なければならぬ過程であるといえよう。

神の本当の愛はどのようにして見つけれられるのか。ユダの荒野で自分に課したこのテーマだけが、今イエスの心を占めている。そして、同時にそれを説くために神が自分をこの世に送られ、それを説くために幾つもの苦しい障害を越えねばならぬことも感じておられた。（『イエスの生涯』76頁。）

ロドリゴとイエスは神の真の愛を証明するために受難を受けたのである。遠藤はロドリゴとイエスの受難に、救援の道を見出そうとしたのではないかと思われる。

4. 1 ロドリゴとイエスの受難と救援

『沈黙』と『イエスの生涯』における受難および救援の様子は、聖書の「イエスの生涯」に基づいて描かれているので、作品の中でロドリゴとイエスの受難と救援を分析する前に、まず聖書におけるイエスの受難と救援の意味を考えてみる必要がある。

聖書では、神が持っている人類の救援の計画が記されている。旧約にイザヤの予言が次のように記されている。

彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり彼が打ち砕かれたのはわたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。わたしたちは羊の群れ道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。その私たちの罪をすべて主は彼に負わせられた。（『聖書』イザヤ書53：3-4）

イザヤが予言した旧約の予言の成就是、時代的・政治的な状況によるところもあるが、ユダの背反から始まる。ユダの背反は、ルカによる福音書22：3に「十二弟子の一人で、イスカリオテと呼ばれていたユダに、サタンがはいった。」と記されている。また、ヨハネによる福音書13：2にも「悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうとする思いを入れていたが」と、27節にも「この一きれの食物を受けるやいなや、サタンがユダにはいった」と記されている。特にヨハネ福音書は、次のように記している。

そして、一同が食事をしているときいわれた、「特にあなたがたに言うておくが、あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」（中略）イエスは答えていわれた、「わたしと一緒に同じ鉢に手を入れている者が、わたしを裏切ろうとしている。たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわざである。その人は生まれなかった方が、彼のためによかったであろう。

（『聖書』マタイによる福音書26：21、23-25）

上のヨハネ福音書に記されているのは、ユダの心がサタンに誘われ、イエスを裏切って、はてはイエスが受難を受けるようになったということである。さらに、イエスはユダに「わざわざである」といっている。

ユダに裏切られたイエスが人々に嘲弄される様子はマタイ福音書の中に、次のように詳しく記されている。

そしてその上着をぬがせて、赤い外套を着せ、また、いばらで冠を編んでその頭にかぶらせ、右の手には葦の棒をもたせ、それからその前

にひざまずき、嘲弄して、「ユダヤ人の王、ばんざい」といった。また、イエスにつばきをかけ、葦の棒を取りあげてその頭をたたいた。こうしてイエスを嘲弄したあげく、外套をはぎ取って元の上着を着せ、それから十字架につけるために引き出した。(『聖書』マタイによる福音書27：28-31)

上のように、イエスは人々から嘲弄されて、十字架にかけられる。その受難の意味は、次のように記されている。

すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。(『聖書』ローマ人への手紙 3：23-25)

上のローマ人への手紙によると、イエスはすべての人の罪のあがないの為に犠牲になる。罪人であるすべての人間のために、キリスト・イエスは自分の血を捧げ、供え物になったのである。その犠牲は、人間の「愛」ではなく、神の「愛」であるといえよう。イエスの十字架の「愛」を通して人類が許され、救われるのである。

それでは、『沈黙』のロドリゴの受難の物語に示される遠藤のキリスト観はどのようなものなのか。『沈黙』で宣教師のロドリゴは、キチジローによって日本へ案内されるが、裏切られて受難を受ける。聖書のユダのような人物としてキチジローが登場するのである。遠藤は、キチジローをユダのように考えるロドリゴを通して、聖書とは違う救援のあり方を、次のように示している。

基督の怒りの言葉をまともに受けたユダは永遠に救われることはないでしょう。そして主は一人の人間を永遠の罪に落ちるままに放っておかれたということになります。しかし、そんな筈はない。基督はユダさえも救おうとされていたのである。（『沈黙』116頁。）

上のユダの救援は聖書で記された「わざわいである」といったイエスの悩みとは違うものである。背反されたロドリゴは、キチジローを許している。それは『イエスの生涯』で、イエスが裏切り者の心を理解していることと同様である。このような物語の展開は、遠藤の個人的な宗教観によるものであると考えられる。

ロドリゴが裏切り者の心を理解しているように書かれているのは、作家の個人的な体験とも関係がある。山根道公は、遠藤の個人的な体験である裏切りに対して、「十歳前後、父と母の離婚してから、前は母親や兄弟と四人で一緒に通ったのを動物園へ自分と兄貴だけ連れて行かれて母親は取り残されたことである。十歳子供にとって裏切ったという感じ、後ろめたさを感じる存在であるという遠藤の意識は、後の遠藤文学の根源的なモチーフとなるものである」⁷⁹⁾と説いている。

遠藤は、中学一年生に洗礼を受ける時の気持ちを「子供ながら祈っているふりをしている自分の偽善が辛かった。自分に嫌悪を感じた。そしてこんな自分を信じさせるようにしてくださいと心のなかで呟いた。（中略）僕は母を裏っているのを毎日かじました。苦しかったが、今は懐かしい母との生活を考えない日は一日もありませんでした」⁸⁰⁾と述懐している。

子供の時の経験は、遠藤に裏切り者の心情への理解を持たせたといえよう。少年時代の母との生活は、裏切りだけでなく、母の受難の共有でもあった。木崎さと子は次のように述べている。

79) 注76) の前掲書、40-71頁。

80) 注76) の前掲書、40-71頁。

幼少期に両親の不和に苦しみ、母の苦悩を分け与えられたことが基底にあるだろう。幼い遠藤氏の“受難”は母の“受難”の共有であった。その母は苦しみの果てに受洗し、息子たちはそれに従った。⁸¹⁾

遠藤において受難は、子供の時の辛かった母との受難と、自分のいくつかの手術や病床体験によって理解されているといえよう。自身の病床体験を直接描いた『満潮の時刻』でも、明石という人物を通して長い入院生活のなかで人間の苦しみが描かれている。

遠藤は、生死をさまよった三度目の手術の後、かつて長崎で見た踏絵の摩滅した哀しげなキリスト像を見た。切支丹時代の素朴な農民や漁民、町人たちにとってこの像を踏むことは、「お袋の顔」を踏むのと同じように切実な苦しみをひき起こした⁸²⁾のである。

踏絵に足をかけた時、転び者の多くは自分の弱さを嘆くと同時に、このような時代に生きたことを悲しんだであろう。彼らの足は基督の顔を踏みながら、痛んだにちがいないのである。⁸³⁾

上のような「痛み」に遭う人間の有り様は、遠藤にとって常に現実のテーマであり続けたと思われる。「痛み」に遭う人物としてのロドリゴは、宣教のために死の危険の中でも日本に来たが、現実的には日本人の信徒たちが自分のために次々と死んでいく中で、耐えがたい苦しみを経験する。すでに殉教したロドリゴの同僚カルペの小さな黒い頭を見る幻影は首を振ると消え、眼をつぶると執拗に眼

81) 木崎さと子「神学と小説の間」『遠藤周作を読む』（笠間書院、2004）13頁。

82) 遠藤周作「『沈黙』踏絵が育てた想像」『遠藤周作全集12』（新潮社、2000）389頁。

83) 注82)の上掲書、389頁。

蓋の裏に纏わりついてくる。日本人の信者が杭にしばられ、沈んでいた海の上で神は、沈黙している。ロドリゴの殉教と背教の決定は彼の心の受難であろう。「もし司祭という誇りや義務の観念がなければ私もまたキチジローと同じように踏絵を踏んだかも知れぬ」というロドリゴの心の声は、作家がエッセイで語っている切支丹時代の宣教師の姿と類似点があると思われる。遠藤は、切支丹時代の宣教師について、次のように述べている。

宣教師たちは、決して転んでもよいなどとは口にださなかったであろうし、むしろ「殉教の進め」「殉教の心得」というような文書を信者たちにまわして、弱者がころぶことを戒めたのである。⁸⁴⁾

ロドリゴは「教理と義務感を守るのか、日本の信者を生かすのか」といった葛藤に苦しむようになる。その時「エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ（なんぞ、我を見棄て給うや）」というイエスの声が胸を突きあげてきた。ロドリゴは、神が「沈黙」し、自分を棄てたと思っているのである。イエスが弟子たちに捨てられたように、ロドリゴは自分も神に捨てられたと思う。ところが、捨てられたからこそ、かえって救援が求められるのではないかと考えられるのである。

遠藤の作品の中には、このように裏切られ、捨てられる人物を通じて救援の可能性を描いている作品が多数ある。『深い河』でも成瀬という女は、大津を「誘惑」して、「墜落」させる。捨てられた大津は同僚の神父からも馬鹿にされてついにインドに流れていって、インドのカトリック教会からも破門される。しかし、大津は喜びに満ちて、死人を肩に背負って河へ運ぶという仕事に従事する。

『沈黙』でロドリゴは、「沈黙」する神に捨てられ、長崎を引きまわされる肉

84) 注17) の前掲書、372頁。

体の受難を経験する。

それら日本人の一つ一つの顔に、光がさまざまな影をつくり、耳もとに何か褐色の塊が飛んできた。誰かが投げつけた馬糞だった。微笑を口もとから消すまいと司祭は固く決心した。驢馬に乗せられて自分は今、長崎の街に行く。驢馬に乗せられてあの人もエルサレムの街に入った。辱めと侮蔑に耐える顔が人間の表情の中で最も高貴であることを彼に教えてくれたのはあの人である。（『沈黙』245頁。）

上のようなロドリゴの苦難は、聖書で嘲弄されるイエスを想像させる。古橋昌尚はロドリゴの受難について、次のように説いている。

ロドリゴは長崎に向けて船と馬とで引かれてゆく「道行き」の過程で幾度も受難のキリストを思い出しては、神とのやりとりを繰り返し、自らの運命をキリストの受難へと重ね合わせてゆく。遠藤はここでロドリゴのキリストへの同一化を意図的に行っている。ロドリゴは、片やキチジローをユダに例えることで、自らの「受難物語」をキリストとの関係において再構築しようとしている。まさに物語が、イエスの「十字架の道行き」の過程に意図的に重ねられて展開する。⁸⁵⁾

遠藤は、ロドリゴの受難をイエスのそれと重ね合わせて書いている。ロドリゴのような苦難と苦痛は、遠藤の他の作品にも見られる。

『深い河』の場合「チャームンダーが病苦や痛みに耐えながら、その『萎びた乳房から人間に乳を与えている』（中略）『インドの母なるチャームンダー

85) 古橋昌尚「遠藤周作の神学予言的ヴィジョン—神学の一形態としての文学とその可能性」『人間学紀要』（通号36）（上智人間学会、2006）166頁。

なんです』と彼はいう。(中略)美津子は受苦の同伴者チャームンダーに心ひかれるという」⁸⁶⁾という佐藤泰正の指摘がある。

また、『侍』の場合も、「ノベスパニアからイスパニア、さらにはローマから日本へと、犠牲と挫折の連続の内に敢行された一行の旅で見られる。当初おびていたはずの任務の成否はおろか目的さえ無化していく。彼らの試練が史実を越えて苛酷にならざるを得なかったのは、それが侍とベラスコにおける、イエスと相似の運命を描くための道程として設定されていたからである」⁸⁷⁾という中村友の指摘がある。

遠藤は、主人公が棄てられて、苦痛を耐えていく過程を通して、イエスが十字架を負い死の丘をのぼる事件と一致させている。「無意識のうちにく棄てられた>受難者は、より高き受難者の方に向き、おのれの歩みをより高き受難者のそれに合わせてしまう」⁸⁸⁾のである。

何度も背反され、受難を受けながらもロドリゴはキチジローを許す。

ロドリゴが何回も裏切られながら、キチジローを最終的に許すことができたのは、自らがイエスを裏切るユダの地位に落ちて初めて可能だったのだ。⁸⁹⁾

ロドリゴは、自分より大きなものの慈悲と、母に対する子の心理を明確に悟ったといえよう。言い換えれば、それは遠藤が説いている母のような日本的なキリスト観であろう。「優しみをこめた眼差しで自分を見つめている。まるでその顔はそう言っているようだった。(私もそばで苦しんでいる。最後までお前のそばに私は

86) 佐藤泰正「『スキャンダル』を通して『深い河』へ」『国文学』(学灯社、1993年9月) 53頁。

87) 中村友「遠藤周作作品を読む『侍』」『国文学』(学灯社、1993年9月) 113頁。

88) 高橋英夫「神とシンクレティズム—『沈黙』について」『国文学』(学灯社、1993年9月) 34頁。

89) 兼子盾夫「遠藤周作における文学と宗教 I—『沈黙』考察—」『横浜女子短期大学研究紀要』(横浜女子短期大学、1999年3月) 25頁。

いる)」（『沈黙』251頁。）というような日本的なイエスは、結局「殉教」を固執しない。

ロドリゴは、殉教して勝利の司祭になることを願っていたが、日本の風土の中で迫害される信者たちを助ける、日本に当てはまるキリスト教の救援を選択した。

『沈黙』の「日本に当てはまるキリスト教」は、遠藤の「私はこの洋服を自分に合わせる和服にしようと思ったのである」⁹⁰⁾と同様の概念であろう。「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分かたため十字架を背負ったのだ」という、母のようなイエスが思い浮かべられるのである。ロドリゴは教理を守る殉教より、他の人の命を生かす愛を、彼の救援の方法として選択したと思われる。これは、遠藤の信仰観を示すものと考えられる。

『イエスの生涯』でイエスは、十二弟子の中で一人の使徒であったユダに銀三十枚の値段のため裏切られ受難される。ユダはイエスにとって特に親密な弟子であった。⁹¹⁾カール・バルトは、ユダの引渡しによって「イエスとその業を完成するためにし給わなければならなかった決定的なこと-、彼の苦しみと死、が始まったのである。」⁹²⁾とユダの引渡しの当為性を説いている。まるで、運命と同様なものである。

ユダの運命と同様なものが『白い人』にもうかがわれる。『白い人』では主人公デュランの悪行が描かれているが、ブロウはデュランのたくらみをしりながら、甘んじて「運命」に殉じる。池内輝雄は「ブロウは『カナの奇蹟』（水を葡萄酒に変える)を自ら実行すべく、デュランの行為（水）を自己犠牲へと昇華（葡萄酒）しようとしたのである。それは時代の悪を引き受け、あたかもユダ

90) 注22)の前掲書、395頁。

91) 本多峰子「ユダは救われるかーカール・バルト『イスカリオテのユダ』と、遠藤周作『沈黙』のよる考察」『国際政経論集』（二松学舎大学、2005年3月）80頁。

92) 注91)の上掲書80頁。再引用。

に売られたイエス・キリストのように自己の生を完成させていくことであった。」⁹³⁾と説いている。遠藤は、次のように、ユダの運命をめぐる苦しみに心からの同情を示している。

我々はユダをイエスの単純な反抗者とは思えない。なぜなら多くの弟子たちがイエスを次々と見棄てた後も、ユダは師のあとを従ってきた一握りの者たちの一人だった彼である、そして他の仲間たちがまだ理解できぬ師の真意を彼だけは感じて、ここまで従ってきたとするならば、彼の心にも苦しい闘いがあったにちがいない。ユダはイエスにも信用されていた筈である。（『イエスの生涯』140頁。）

遠藤は、上のように語っているが、聖書は、ユダについて詳しく記していない。イエスは、「行くがいい。そしてお前のしたいことをするがいい。」とユダにいう。聖書のこの部分に対して遠藤は、「イエスがユダに言ったのは憎悪の言葉ではなかった」と説いている。背反されたイエスは、ユダの苦しみも知っておられたと見ているのである。また、遠藤は、ユダについて次のように述べている。

ユダは聖書の中で最も奇怪な暗黒的な人物である。それはユダ自身の心理が謎めいているだけでなく彼にたいする基督の心理も更に謎めいているからだ。そして彼と基督との関係が謎めいていればいるほどこの人物は我々のさまざまな想念を疼かせるが、この理解困難な人物を主人公に扱った西欧の小説を私は未だ読んだ事がない。⁹⁴⁾

遠藤は、「西欧の作家が理解困難なユダを主人公にして小説をかけなかつ

93) 池内輝雄「『沈黙』の方法—『深い河』への行程」『国文学』（学灯社、1993年9月）39頁。

94) 注51) の前掲書、296頁。

たのは基督のこの男に対する感情があまりに深いせいであろう」⁹⁵⁾と述べている。

遠藤は、最後の晩餐におけるユダの裏切りを「原始キリスト教団で創作し、編集された観点からポルンカムがその名著『ナザレのイエス』で指摘のように詩篇41章の言葉から作られたものである」（『イエスの生涯』145頁。）という。ポルンカムの見方は引用解釈が煩雑で、旧約の言葉から触発されたイメージを挿入したのだと断定するのはあやまっているし、行きすぎているように思われると説いている。遠藤は、ユダが銀三十枚のため師を取引したということについても、「旧約のゼカリヤ書11:12の〈彼等は（神の値段として）銀三十シケルを払った〉という言葉を借りてきたということになる」（『イエスの生涯』145頁。）と述べている。しかし、イエスの受難物語が、事実ではなく真実であることを強調している。

「『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ、』という詩篇22編と『我が魂をみ手に委ねたてまつる 主よ まことの神よ 汝は我をあがなわれたり』という詩篇31編の句に転調していった」（『イエスの生涯』210頁。）といているのを見ると、イエスの受難は旧約の成就であるように理解される。しかし、遠藤は旧約の予言の成就であるとはいわない。「受難物語」に対する旧約聖書の言及は、神の「愛」が新約だけに局限されたものではないことをいうのである。肝心なのは、「受難物語」の核心がイエスの「愛」であるということである。

『イエスの生涯』について、宮野光男は次のように述べている。

無力のイエス像であり、それが受け入れられる精神的基盤として、エルサレムの荒野を想定している。〈やさしさ〉の欠けている、すなわち〈愛〉の欠けている死の世界である。⁹⁶⁾

95) 注51) の前掲書、300頁。

96) 宮野光男「遠藤周作の作品を読むー〈イエス・キリスト〉」『国文学』（学灯社、1993年9月）116頁。

遠藤が『イエスの生涯』を語る本来の目的は、聖書のイエスを通じて「愛」の欠けている世において神の「愛」を強調するところにあると思われる。

『沈黙』と『イエスの生涯』におけるロドリゴとイエスの「受難と救援」は聖書とは違うものであるが、聖書を否定したといえない。たとえば、『沈黙』や『イエスの生涯』における受難の場所の類似性は、興味深い。ロドリゴの受難の背景は日本であるが、それはイエスのエルサレムを思い浮かべさせる場面である。また『イエスの生涯』におけるイエスの受難の背景はエルサレムであるが、ロドリゴが引き回された長崎の道が思い浮かべられるのである。これは、遠藤が日本人の作家としてイエスの苦難の道を思い浮かべ、それを作品に持ち込んだことをうかがわせる。

遠藤は『キリストの誕生』のあとがきでも、次のように述べている。

『イエスの生涯』を書いた著作は古今東西、無数にある。それなのにあえて同じ題でこの『イエスの生涯』『キリストの誕生』を発表したのは、何よりも私が日本人であり、私の読者が日本人の読者だからだ。日本人の私ができる「イエスの生涯」でなければ、日本人の読者の共感をえないと私は長いこと考えていた。（中略）聖書をよみ、基督教を考えるたびに私はそこに日本人にも親しめるイエスのイメージを発見した。そしてそのイエスこそ「私のイエス」となった。⁹⁷⁾

遠藤は日本人の読者の共感をえるために『イエスの生涯』を書いたのである。先述したように、ロドリゴの救援とイエスの救援とは互いに違いがある。ロドリゴの救援は予定されたものではない。それは、殉教を願う宣教師としての戒めを

97) 注21) の前掲書、356頁。

逆らうものの、自分も生かし、他の人も生かす、世の中の救援であろう。しかし、イエスの救援は旧約からの定められたものである。それは旧約からの予言の成就であり、自分が死んで他の人を生かす永遠の救援である。

聖書と遠藤の作品における受難の共通的な意味は、「愛」である。聖書のそれは、人類の救援のため神の「愛」であり、『沈黙』の場合は、ロドリゴが日本人信者を救援するための「愛」であり、『イエスの生涯』の場合も日本人に理解できる神の「愛」である。

『沈黙』と『イエスの生涯』でイエスは「沈黙」し、「無能」で「助けにならぬ」主人公であった。しかし、受難の後、「愛」の救援者になったのである。奇蹟を行って民衆の期待を満足させることより、彼等を感じさせる愛の実践者となるのが、遠藤が求めていた日本人に合うイエス像ではないだろうか。

ところで、イエスの復活後、弱虫であった弟子たちがイエスの死の前と違って、「力ある弟子たち」に変わっていくようになる。この変化の問題については、次の「節」で考えてみたいと思う。

4. 2 遠藤におけるイエスの「謎」

『イエスの生涯』の第13章には、「謎」の問題について「聖書を始めて接した日本人ならばおそらくこの疑問を持たずにはここを読まないだろう」としながら、次のような二つの「謎」が示されている。

まず第一の「謎」は、「弱虫だった弟子たちがなぜ、やがて強き使徒になったのか」ということである。「『復活』というテーマはこの『謎』から解いていかねばならぬのである」と述べている。また、「イエスがなぜ、弟子教団から神格化されたのか」という問題に触れている。

第二の「謎」は、なぜイエスの弟子たちの教団だけが存続しえたかと言う問

題である。イエス教団だけがイスラエルの外に進出して多くの異邦人たちに布教したのに対し、他のグループは頑強にユダヤ世界の枠に閉じこもっていたのである。

この二つの問題に対して「様式史方法や編集史方法の聖書学者はこの謎には手を触れようとはしない」（『イエスの生涯』224頁。）と指摘し、彼等は聖書が聖書である本質的な問題を避けているとしか見えないと述べている。復活信仰は多くのグループのなかでイエスの弟子教団だけにあり、しかもそれが教義の中核になっているのはなぜなのかなど、疑問を示している。遠藤はこのような問題に対して自分独自の解答を出してはいるが、「決定的な何かがある」というだけにとどまっている。

『イエスの生涯』では、次のような二つの言葉があえて避けられている。一つは「サタン」という悪魔であり、もう一つは「聖霊」である。これらは、「聖霊、直ちにイエスを荒野に往かしめ給いしが、四十日、四十夜、荒野にありてサタンに試みられ…」というマルコ福音書の引用によって示されるだけで、独立的には用いられていない。「悪魔が既にシモンの子イスカリオテのユダのところに、イエスを裏切ろうとする思いを入れていたが」という聖書の表現のようなものはない。遠藤は直接的な表現を避けて、「謎」を使って読者に考える機会を与えているのではないかと考えられる。

キリスト教は聖父・聖子・聖霊の三位一体の宗教である。遠藤周作編『キリスト教のハンドブック』には、三位一体について、次のように説明されている。

人間は、神に従い、神の愛の中に生きるように、神によって創造された。しかし人間は、愛の基本的要素である自由意志を用いて、この神に反逆した。これが人間の原罪である。その結果、多くの罪が生じ、死が人間の世界に入りこみ、自然界の秩序は破壊され、人間の社会

は混乱している。しかし人間は、今や自分の力ではこの現状を回復することができない。そこで神は、人間を救う道を開かれた。98)

上の説明は、聖父の神についてのものである。

それは、神の一人子であるイエス・キリストを地上におくり、十字架にかけ、人間の罪を示した。しかも神は、そのイエスの十字架によって、人間の原罪と罪とをあがなった。そして人が、そのことを信じるときに、神と人間との関係を正しくする道を開かれた。それが救いである。しかも十字架による死の後で、イエスは復活し、神のもとに帰り、99)

上の説明は、聖子の神についてのものである。聖子の役割は、十字架にかけられて死ぬことによって神の愛を現わすことである。

神ともに聖霊を地上におくった。そのことによって、肉体の死が終わりでないことを示し、復活の日の希望を与え、聖霊によって日常生活に導きを与えている。イエス・キリストは地上に再び来て、神とともに世界の歴史を裁かれる。それが最後の審判である。100)

聖霊の役割は、人間の日常生活に導きを与えることである。キリスト教では聖父・聖子・聖霊を一体として、神であるという。簡単に「父なる神を、御子を通して、聖霊によって知るに至った」¹⁰¹⁾というように、三位一体の意味が説明され

98) 遠藤周作編『キリストのハンドブック』（三省堂、1993）39頁。

99) 注98)の上掲書、39頁。

100) 注98)の上掲書、39頁。

101) 芳賀力「三位一体と共同体」『神学Journal of theology』（Vol.65）（東京神学大学、2003年12月）27頁。

る。

『沈黙』と『イエスの生涯』では、聖父・聖子だけが語られている。それでは、遠藤は聖霊を否定しているのだろうか。否定しているのではないと思う。別の言葉で表現しているのである。

基督教のほうで縁という言葉はない。おそらく縁という言葉は基督教用語にはないであろう。しかしこの言葉がないからと言って一人の人間が多く
の眼に見えぬ存在に助けられて生きていることを否定するのではないだろう。いや、むしろ一人の人間が人生の本当のありかたを知るためには有形無形の生命の助けが必要なことは基督教も肯定しているのである。102)

縁が聖霊であると考えるのは危険である。それは教理的な問題と関わっているからである。しかし、遠藤は文学的な意匠によってそのように表現したと考えられる。

ところで、『イエスの生涯』では「謎」という言葉で疑問を示しているが、『イエスの生涯』の続編というべき『キリストの誕生』でも「イエスのふしぎさ、ふしぎなイエス」というような言葉で疑問が示されている。イエスの受難以後、「処刑までの二日間、息をひそめ、かくれていた弱い弟子たちがなぜ、それ以後、信仰に生き続けられたか」（『キリストの誕生』[新潮社、2000]339頁。以下、『キリストの誕生』と略す。）という質問である。

イエスの受難にはこのような神の与えた深い意味があり、このような神の意志が働いたのだ、と強調し、また自分たちの信仰を納得させるため

102) 遠藤周作『神と私人生の真実を求めて』（海竜社、2000）227頁。

に、預言者の言葉とイエスの受難とを調和させようとしたのである。（『キリストの誕生』342頁。）

上のように遠藤は『キリストの誕生』で、イエスの死後、弟子たちが自分に突きつけられた「謎」を必死で解こうとしている中でイエスが神格化されたと見ている。

『キリストの誕生』でこの「謎」は「X」と表現されているが、意味は同一である。「神話を生み出させるXがなければ、」（『キリストの誕生』346頁。）といているが「X」は「謎」に置き換えても意味は変わらないと思われる。

その決定的なXは不幸にして文字で書いた福音書からは知ることはできぬ、それはひとつの強烈な人格が他人に与える衝撃であって、言葉ではとても表現できぬものであろう。（中略）人間が彼を聖なるものとしただけでなく、彼にも聖なるものとされるに値した何かがあったのだ。（『キリストの誕生』346頁。）

上のように遠藤は「謎」、すなわち「X」について説明している。

弱虫はどうして強虫に変化しえたか。弱者はどうして強者と変わったか。新約聖書のなかにはその謎がふくまれている。このテーマは今、私の心を烈しく動かしてやまない。103)

なぜ惨めそのものの死を遂げた一人の男が彼を見棄てた弟子たちから救い主として考えられるようになったのか。遠藤の作品において、弟子たちの夢や希望を挫折させた師が、なぜその弟子たちから死後、逆に愛のメシヤとして仰がれるようになったのかという疑問に対する答えは、明確に出されていない。しかし、この

103) 遠藤周作「弱虫と強者とについて」『遠藤周作全集13』（新潮社、2000）78頁。

「謎」は「聖霊」の問題とかかわっているのではないだろうか。

ヨハネ福音書における聖霊の記録は、次のようである。

ヨハネはまたあかしをして言った。わたしは、御霊がはどのように天から下って、彼の上にとどまるのを見た。(『聖書』ヨハネ福音書1:31)

しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起こさせるのであろう。(『聖書』ヨハネ福音書14:26)

遠藤は、先述したように『イエスの生涯』で「聖霊、直ちにイエスを荒野に往かしめ給いしが、四十日、四十夜、荒野にありてサタンに試みられ…」(『イエスの生涯』30頁。)とマルコの福音書を引用しているが、聖書の中にある聖霊の役割には触れていない。「聖霊」という言葉は日本人にとって理解しにくい概念であり、イエスを信仰しない人には信じられない存在であろう。

遠藤は『キリストの誕生』で、使徒ポーロ¹⁰⁴⁾の伝導旅行記に触れながら、次のように述べている。

このアテネの敗北を読むたび、日本人の信者である私はさまざまな思いにかられる。ギリシャ人と同じように、勿論、ギリシャ人と違った形であるが汎神的な世界に生きてきた日本人の我々が一神論のポーロ神学を実感をもって理解することが、いかに難しいか。いかに長い時間がかかったか。それをおもいうかべると、このアテネにおけるポーロの記述は他人事ではないような気がするからだ。(『キリストの誕生』303頁。)

104) 広辞苑による。「キリスト教をローマ帝国に普及するのに最も功の多かった伝道者。パウロ、パオロ、ポール、ポーロ」

遠藤は、ポーロのアテネの布教の敗北のように、一神論のポーロ神学が日本人にも実感をもって理解されることが難しいことを感じたと思われる。三位一体の神、特に聖霊という概念をどのような方法で文学の中で理解させることが出来るか。それはまた、遠藤の「謎」かも知れない。

弱虫だった弟子たちがやがて強き使徒になり、多くの国々に渡って「あまねく教えをのべる」ようになったことは、聖書の中にその答えがあるのではないか。

ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。（『聖書』使徒行伝1：8）

上は使徒行伝第一章の文であるが、イエスが復活後、弟子たちに語った言葉である。続く九章ではポーロが信者を迫害する途中、聖霊の声を聞く場面が出てくる。遠藤は『キリストの誕生』でポーロの伝道旅行を詳しく記しているが、「聖霊」には触れていない。しかし、遠藤が編集した『キリストのハンドブック』における「聖書の読み方」には、「聖書は、そのような意図のもとに、聖霊の導きによって形成されたものであるから」¹⁰⁵⁾とある。

『イエスの生涯』で遠藤は、「聖霊」という直接的な表現を使わずに、「謎」、「X」、「決定的な何」などのような言葉で表している。これはキリスト教を知らない読者の注意を引くための意図ではないかと思われる。ところで、遠藤は『イエスの生涯』で、「謎」に対する答えとして「愛」という言葉だけを繰り返して用いているが、「謎」の問題を「愛」という言葉だけで解くことができるだろうか。

105) 注98) の前掲書、51頁。

『沈黙』でロドリゴに「踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ」というイエスは、実体としてのイエスなのか、ロドリゴの心の中の思いなのか、それとも聖霊なのか。これは『沈黙』における「謎」であろう。

聖書の「使徒行伝」九章で信者を迫害していたサウロがダマスコへの途上で声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか…、わたしは、あなたが迫害しているイエスである(『聖書』使徒行伝9:4)」というものは聖霊の声である。これに関わって「兄弟サウロよ、あなたが来る途中で現われた主イエスは、あなたが再び見えるようになるため、そして聖霊に満たされるために、わたしをここにおつかわしになったのです(『聖書』使徒行伝9:17)」と記されている。山根道公は、『沈黙』でロドリゴが聞いたイエスの声は、パウロの宗教体験を描いた聖書のモチーフとして想起されると説いている。

キリストの声を聞くという宗教体験を描いた聖書のモチーフとして想起されるのは、(中略)パウロの魂の領域で起こった宗教体験の真実を伝えることこそ意味があったにちがいない。このことは、同じく三度記されているロドリゴの踏絵体験の表現と通じる点があり、そうした聖書の表現を意識していたであろう可能性は十分に考えられよう。106)

『キリストの誕生』におけるポーロの使徒行伝は、聖書のそれと違う。聖書の中で、聖霊の声を契機に「サウロ」が「ポーロ」になったことにも触れてはない。しかし、少なくとも聖書の内容を根拠として作品が書かれているから、『イエスの生涯』と『キリストの誕生』における「謎」および「イエスのふしぎさ、ふしぎなイエス」を、聖書の「聖霊」として想定できると思われる。

106) 注79) の前掲書、311頁。

キリスト教の聖霊は遠藤周作編『キリストのハンドブック』に「日常生活に導きを与えている」と記されている。『イエスの生涯』における「同伴」、すなわち悲しみや苦しみをわかち合う「同伴」には「導き」の意味があると思う。「同伴」を「同行」に置き換えると、「導き」には「案内」の意味があるからである。従って遠藤は、『イエスの生涯』で「聖霊」の代わりに「謎」と書き、その「謎」の解きの代わりに「愛の同伴者イエス」を描いたのではないかと推測できるのである。

遠藤は、『キリストの誕生』でポーロが不屈の信念に燃えて伝導旅行をすることについて書いている。G・ネランは遠藤の洗礼名をパウロ（ポーロ）であるのを紹介しながら、次のように述べている。

現代日本にとって、キリストを知るために、聖書のイエスに出会うことは唯一の道である。それが遠藤にはよく分かっていた。遠藤の読者の圧倒的多数は信者でない人たちである。彼は信者でない人々にキリストを述べつたえた。107)

G・ネランが述べているように、遠藤は、一生をかけて一途にカトリックの作品を書き続けた。しかし、作家である遠藤には二つの「謎」があると思われる。一つは作品の中の「謎」であり、もう一つは遠藤の心の中にある「謎」である。心の中にある「謎」を解けばおのずから作品の中の「謎」も解けると思う。文学者である遠藤は、次のように言う。

だがもしカトリック文学が〈カトリシズムに於ける文学〉ではなく〈文学に於けるカトリシズム〉として取りあげられると解決は決して容易ではない。

107) 注40) の前掲書、211頁。

何故ならくカトリシズムに於ける文学 > つまりカトリシズムの護教的、布教的手段のために書かれた作品では作品の技術は作家の護教的目的に左右されるのであるが、小説家的良心と近代小説に於ける人間探求の方法が発展すると共に、カトリック作家は他の作家とともに作品の芸術的純粹に関心を払わずにいられない。108)

そして、キリスト教の教えを真理であると考えて、信頼する遠藤は次のように言う。

私は基督の教えが他の諸思想より私には一番ふかい一番たかい真理だと考えている。基督の教えにたいする信頼感私の心の底に今日あるのだ。小説を書けば書くほど私には基督以外に自分の人生の指針や目標を考えることはできなくなってきた。小説を書けば書くほど私は彼を信じてきたし、その信念は今のところ当分、ゆるがないように思える。109)

キリストへの信仰は慣習や儀式ですむものではなく、人間に生きる目的を与えるものである。遠藤における信仰は「生き甲斐」という表現が最も的確に説明できると思われる。遠藤は、使徒のような信念を持っていたのではないかと考えられる。聖書のコリント前書で、ポーロは次のように書いている。

私はユダヤ人にたいしてはユダヤ人になった。それはユダヤ人を得るためである。律法の下にある人々にたいしては私自身、律法の下にはないが、律法の下にあるように振舞った。それは律法の下にある者を得るためである。(『聖書コリント前書9：20』)

108) 注40) の前掲書、97頁。

109) 遠藤周作「私と文学」『遠藤周作全集12』(新潮社、2000)378頁。

遠藤は、ポーロのような熱情で文学による使徒旅行をしたいと思っていたのではないかと考えられる。しかし、一方では、次のように矛盾となる葛藤が彼にあったようだ。

基督教徒であり、日本人であり、しかも作家である私には、いつもこの三つの条件関係、その対立が念頭にある。三つの条件は残念なことには未だ私のうちで調和、統一されず、むしろ多くの場合に矛盾をしめすのである。悪の世界から身を守らねばならぬ基督者としての義務と、人間の悪の世界にも敢えて眼をむけねばならぬ作家としての義務と矛盾を、私は今日まで『カトリック作家の問題』その他の評論で考えてきた。110)

遠藤が「聖霊」と「サタン」を彼の作品の中で表現しなかったのは、上のような三つの条件関係と対立により自身さえ矛盾になるためであっただろう。基督教徒として神を凝視することと、作家として人間を凝視することとの間で調和を求めたのではないかと考えられる。

110) 遠藤周作「日本的感性の底にあるもの」『遠藤周作全集12』（新潮社、2000）300頁。

本研究では、小説の『沈黙』と評伝の『イエスの生涯』を中心に、遠藤周作のキリスト観を考察した。『沈黙』に関する従来の研究は、宣教師であるロドリゴと聖書のイエス、キチゾローとユダを対比しながら論じるものであった。『イエスの生涯』に関しては、まだ本格的な研究は提出されていないが、聖書そのままのイエスでない遠藤独自のイエス像を構築した作品であると評価するところでは一致している。

『沈黙』におけるロドリゴの苛烈な潜伏行が『イエスの生涯』におけるキリストの受難の歩みに似ている点と、両作品で共通的に「沈黙」するイエスが描かれている点に着目して、両作品に遠藤のキリスト観を分析してみた。

先ず、Ⅰ章では、日本のキリスト教と遠藤の信仰的な背景を、日本にキリスト教が土着されなかった様々な理由と関連付けて分析した。日本の伝統的な宗教観や文化、道徳、生活など、日本的な感性は、西欧の異質的なキリスト教を受け入れにくくする原因となった。明治の大基督者である内村鑑三の影響を受けたキリスト教の文学者たちは、キリストを罰する「絶対者」として認識したのである。遠藤は「母の信仰」の影響によって洗礼を受けるが、フランスの留学の経験を通じて西欧のキリスト教が根をおろさぬ日本の風土について考えるようになったのである。遠藤は、距離感のある西欧のキリスト教を、どのように身近なものとして理解するかを工夫しながら、基督教の文学をめざしたのである。

Ⅱ章では、『沈黙』の三人の登場人物に投影されている遠藤の信仰観を分析し、ロドリゴの布教の初めに現われる威厳に満ちたイエスの顔が迫害の下で無力になり、結局哀れそうなキリストのイメージに変化することについて考えてみた。このように変化したキリストのイメージは、遠藤が求めるイエス像と同様であると思われる。遠藤は、フェレイラが背教せざるをえなかった言い訳を示して、西欧のキリスト教が根をおろさぬ日本的な風土の問題を指摘した。そして、聖書のユダと同一視されるキチゾローに遠藤自身の心情を投影して、能動的にキリスト教を抱えようとし

たと思われる。

Ⅲ章では、『イエスの生涯』の中で繰り返し用いられる言葉の意味を、『沈黙』におけるイエスのイメージと関連づけて考えてみた。遠藤は『イエスの生涯』で、全能な神の一人子を描いたのではなく、「無力」で「無能」な人間であるイエスを描きながら、死をもって示されるイエスの「愛」を強調した。このようなイエスは、『沈黙』において「沈黙」する神のイメージと一致する。人間的な恐怖と絶望にあるものの「沈黙」を守り続ける神は、『イエスの生涯』におけるイエスのように「無力」で「無能」な存在なのである。しかし、神は決して「沈黙」したのではなく、十字架で死ぬことによって「愛」を具現したのである。

また、遠藤は現実において信じることのできる物語を「慰め物語」といって、「事実」であるとし、信じがたい「奇蹟物語」を「真実」であると捉えている。「奇蹟物語」より、目撃者である弟子の記憶に生き生きとしてあった「慰め物語」の方が人々の哀しみに訴えるものがあつたと語っている。

そして、遠藤は「洗礼ヨハネ」を旧約の厳格な「父なる神」のように、「イエス」を新約の「母なる神」のように描きながら、西欧のイエス像を日本に合うイエス像に変化させたといえよう。

Ⅳ章では、『沈黙』と『イエスの生涯』における「受難と救援」が聖書のイエスの「受難と救援」とどのように違うのかを比較・分析し、「受難と救援」の意味を考えてみた。『沈黙』におけるロドリゴは、「殉教」して勝利の司祭になることを願った。しかし、遠藤は、日本の風土の中で「殉教」が必ずしもキリストに従うことではないといっているように見受けられる。彼はロドリゴを通じて、迫害を受ける信者たちを生かす、日本に当てはまるキリスト教の救援を描きたかったのである。

『イエスの生涯』では、イエスを背反した弱者の弟子たちがイエスの復活の後、なぜ強い信仰を得たのかという問題が提起されている。遠藤は、「謎」という言葉でその疑問を示している。『イエスの生涯』の続編といえる『キリストの誕

生』でも「イエスのふしぎさ、ふしぎなイエス」のパートが設けられている。ところが、このパートでも決定的な「謎」を解く答えは出されていない。

それで、「謎」および「イエスのふしぎさ、ふしぎなイエス」を「聖霊」と関連づけて考えてみた。遠藤は基督教に無縁だった読者に、聖書の「聖霊」の代わりに「謎」として提示して、基督教の本質を読者自らが理解し、その「謎」を解くようにしたのではないかと考えられる。つまり、「聖霊」を「謎」と表現して、「聖霊」を治める神が存在することを間接的に示したと思われる。一人の霊魂が天下より尊いということを悟った基督教の信者は、他の霊魂に関心を持つようになる。遠藤が一生基督教という一つのテーマと信念をもって作品を書き続けたということは、彼に霊魂を恋慕する心があったためではないかと考えられる。ミステリーのような「謎」は、「聖霊」と結び付けられており、そこに遠藤の基督教観が託されていると考えられる。

『沈黙』と『イエスの生涯』において、イエスは「母なる神」「愛の同伴者イエス」「なぞの神」のように描かれている。しかし、聖書の中のイエスは完全な神で、完全な人間である。不完全な人間が完全な神を理解することはできないのである。遠藤は、神の愛を日本の風土の中で理解してもらうために、優しく温かいイメージを持つ「母なる神」を持ち出したのではないだろうか。そして、聖なる神には近づきたいがゆえに、聖なることを取り除いて神を同伴者として描いたのではないかと考えられる。

参考文献

1) 単行本

- 遠藤周作『沈黙』（新潮社、1981）
- 遠藤周作『イエスの生涯』（新潮社、1982）
- 遠藤周作『遠藤周作文学全集』11（新潮社、2004）
- 遠藤周作『遠藤周作文学全集』12（新潮社、2004）
- 遠藤周作『遠藤周作文学全集』13（新潮社、2004）
- 遠藤周作『遠藤周作文学全集』14（新潮社、2004）
- 遠藤周作『遠藤周作文学全集』15（新潮社、2004）
- 遠藤周作編『キリストのハンドブック』（三省堂、1993）
- 笠井秋生『遠藤周作論』（双文出版社、1987）
- 広石康二『遠藤周作のすべて』（朝文社、1991）
- 日本聖書『新約聖書』（日本聖書協会、1985）
- 山根道公『遠藤周作 その人生と沈黙の真実』（朝文社、2005）
- 강병도편『호크마성경주석』（기독지혜사, 1990）

2) 論文

- 天羽美代子 「遠藤周作『イエスの生涯』における〈イエス像〉造形過程の一考察-シュダウファーの「イエス-その人と歴史-」の影響について」『高知大国文』(No.35) (高知大学国語国文学会、2004)
- 池内輝雄 「『沈黙』の方法-『深い河』への行程」『国文学』(学灯社、1993年9月)
- 池田純溢 「遠藤周作『沈黙』の研究-〈切支丹屋敷役人日記〉・〈実〉と〈虚〉との間」『上智大学』(26、19、34) (上智大学国文学論集、1993)
- 石内 徹 「遠藤周作『沈黙』論『清和女子短期大学紀要』(Vol, 30) (清和大学短期大学部、2002年1月)
- 兼子盾夫 「象徴と暗喩で読み解く遠藤文学の世界-『沈黙』の場合」『横浜女子短期大学研究紀要』(Vol、21) (横浜女子短期大学、2006年3月)
- 「遠藤周作における文学と宗教 I -『沈黙』考察 I -」『横浜女子短期大学研究紀要』(横浜女子短期大学、1999年3月)
- 川島秀一 「遠藤周作『イエスの生涯』〈事実〉と〈真実〉の間-イエスの原像を求めて」『山梨英知短期大学国文学会』(Vol. 30) (山梨英知短期大学、1998年2月)
- 木崎さと子 「神学と小説の間」『遠藤周作を読む』(笠間書院、2004)
- 小淵昭夫 「わが思索の後〈インタビュー〉中〈聖書の中の事実と真実〉」『遠藤周作の世界』(146) (朝日出版社、1997)
- 佐藤泰正 「『スキャンダル』を通して『深い河』へ」『国文学』(学灯

- 社、1993年9月)
- 管原とよ子「遠藤周作『沈黙』論(二)―日本人の琴線に触れた文学」
『国語国文学研究』(熊本大学文学部国語文学会、2006年3月)
- 高橋英夫「遠藤文学における弱者と母」『遠藤周作の世界』(朝日出版社、
1997)
- 「遠藤周作-グローバルな認識-『沈黙』から-神とシンクレティズム-」
『国文学』(学灯社、1993年9月)
- 「神とシンクレティズム-『沈黙』について」『国文学』(学灯社、1993年9
月)
- 高堂要「海外における遠藤文学評価-普遍的で個別的」『国文学』(学灯
社、1993)
- 高山鉄男「モーリヤックと遠藤周作」『国文学』(学灯社、1993年9月)
- 高橋千劔破「遠藤周作に置ける心の故郷と歴史小説」『遠藤周作を読む』(笠間書院、
2004)
- 柘植光彦「イエス像―<遠藤神学>の円環が閉じる時」『国文学』(学灯
社、1993年9月)
- 武田友寿「母性をめぐる体験」『遠藤周作の世界』(朝日出版社、1997)
- 中村友「遠藤周作作品を読む『侍』」『国文学』(学灯社、1993年9
月)
- 芳賀力「三位一体と共同体」『神学Journal of theology』Vol.65(東京神学大
学、2003年12月)
- 藤本武「『痛み』の定義とその発生に関する比較文明論的考察-神教、仏
教、日本、医学的霊域における」『新潟青陵大学紀要』(新潟
青陵大学、2005年3月)
- 古橋昌尚「遠藤周作の神学予言的ヴィジョン-神学の一形態としての文学と

その可能性」『人間学紀要』（通号36）（上智人間学会、2006）

細川正儀「遠藤周作文芸とキリスト教-『沈黙』に至る道」『人文論究』（Vol. 56）（関西学院大学人文学会、2006年5月）

本多峰子「ユダは救われるか-カール・バルト『イスカリオテのユダ』と、遠藤周作『沈黙』による考察」『国際政経論集』（第11号）（二松学舎大学、2005年3月）

「遠藤周作詩論<母なる神-西洋キリスト教と日本人の宗教観の相克と、宗教多元論的解決>」『二松学舎大学東洋学研究集刊』（二松学舎大学、2001年3月）

松浦勝男「遠藤周作に見る<文化受容-キリスト教的価値とその土着化について>」『比較文明』（通号16）（比較文明学会編、2000）

宮野光男「遠藤周作の作品を読む-<イエス・キリスト>」『国文学』（学灯社、1993年9月）

山根道公「解題」『遠藤周作全集11』（新潮社、2000）

G・ネラン「パウロの弟子パウロ遠藤周作」『遠藤周作の世界』（朝日出版社、1997）

クロード・エスカリエ「モーリヤックとユダの神秘」『上智大学仏語・仏文学論集』（上智大学、1992）

3) 対談

遠藤周作・加賀乙彦「最新作『深い河』-魂の問題」『国文学』（学灯社、1993）

森岡巖編「座談会-神の沈黙と人間の証言」『福音と世界』（新教出版社、1966）

ABSTRACT

Outlook on Christ of Shusaku Endo "tinnmoku" Mainly on "iesunosyogai"

sung hee - Lee
Department of Japanese
Language and Literature
Graduate School of
Sungshin Women's University

This thesis hopes to compare and find similarities between the characters in Shusaku Endo's "Silence"(Rodrigo) and "the life of the Jesus"(Jesus) and discover Endo's view on Christianity.

Endo is the representative Japanese author of Catholicism and he devoted his life to the catholic culture and development.

"Silence" is a novel published in 1966, and is recognized all over the world.

His works, after "Silence" include "A silhouette"(1968) about a mother and Herutyoku priest, "A mother thing"(1969) also about a mother, and "The bank of Dead Sea"(1973), a series about the followers of Jesus.

However these works were difficult to understand by readers,

and the author focused on biographical Literature, and after years of research on Jesus, the masterpiece "the life of the Jesus" was born and it became a method for many Japanese people to understand Christianity.

After the publishing of "Silence", the author focused on the mother figure and Jesus for seven years, and the combined research and collaboration gave birth to "the life of the Jesus". It became recognized, not of the greatest works in Japanese religious works of art.

In "Silence", the missionary Rodrigo is receives help from a Japanese guide Kichijiro and succeeds in going into Japan but is later faced with trouble due to Kishijiro's betrayal. The missionary wants to become a martyr because of his religious creed, but is forced to become an apostate to save a Japanese believer. While the character faces his greatest challenges that test his faith, "God" remains silent throughout the novel.

In "the life of the Jesus", the author paints Jesus as a helpless and incompetent God figure unlike the public and disciples expected. Not only does it not show him as an all mighty figure but it questions the silent and helpless god when faced by humans in despair.

What is the Jesus figure that Endo hopes to show in these two works? This thesis hopes to show the connection between the two as the similarities are numerous than any other pieces of work.

The research was conducted, first by recognizing the background of Japanese Christianity and its Christian culture

as well as Endo's religious beliefs. An analysis on the background and reasons why Christianity was difficult to settle in Japan was also conducted.

Second, by observing the three main characters in "Silence" , noted Endo's image of the Jesus figure and analyzed the cultural reasons why Christianity had a difficult time settling in Japan as well as noting that the author himself is being reflected in the character Judas who betrayed Jesus.

In "the life of the Jesus", the usage and meaning of the words helplessness and incompetence, reality and truth was analyzed, and by comparing the characters of the disciple Joseph and Jesus, observed Endo's image of the Jesus figure.

Finally, a comparative look at the troubles and woes of the characters Rodrigo from "Silence", and Jesus from "the life of the Jesus" was taken and analyzed the riddle shown in "the life of the Jesus".

In a nation with deep rooted traditions and history, Christianity had a difficult time settling in Japan, and as Endo was somewhat forced by his mother to take up the religion, it felt awkward and uncomfortable for him. As he grew older, he changed his perspective and began to change the way he looked at Christianity to suit the Japanese way of life.

The image of a powerful and strong fatherly figure of Jesus that is prominent in Western cultures, changed to a softer, weaker and more considerate figure like an all forgiving mother. The fact that Jesus is forgiving towards Judas who passed him over for 30 silver coins, shows the changing,

forgiving characteristic of Jesus.

Jesus does not perform miracles, but shows helplessness as he is led to the cross but at the same time, forgives the disciple that betrayed him and those who are in the crowds.

Although performing a miracle may satisfy those and receive a momentary happiness, Endo's figure of Jesus becomes a comforting, and eternal companion for those around him.

The stories of Jesus' miracles are considered, not as fact but truth, and the stories of his forgiveness are considered as fact instead. Through recognizing both the truth and facts, the depth of religious belief is considered with more importance.

Also, through Endo's representation of the disciple Joseph as the strong fatherly god figure, and Jesus' representation as the motherly figure, it shows exactly what image Jesus has and Endo himself believes.

Through the struggles of Rodrigo and Jesus, it emphasizes the love of Jesus and helps readers find out that real salvation behind the process of despair lies, not in the disappointment of individuals but in the perseverance and hopes that one day they will receive salvation.

After Jesus' resurrection, the disciples who betrayed Jesus spread out across the world to pass on the message taught by Jesus, but the reason why they did so, still remains a mystery. This mystery given by Endo also appears in the follow up book to "the life of the Jesus", "Birth of Christ".

To solve this mystery, a comparative analysis between the holy Trinity and Endo's pieces of works were conducted.

In the two books mentioned above, the Father, and the Son were mentioned but the Holy Spirit was not.

However, as the two books are based heavily on the bible, the author allows Japanese readers, not to be influenced solely by the text, but have them to find an interest in finding more about the Holy Spirit.

Endo's Christ figure is repeated and emphasized throughout the two novels and represents the love of God as a loving motherly figure that readers can easily understand.

This means that God is not represented as someone that people look up to admire at a distance, but a person who is forgiving to those who betrayed him and even by death on the cross, he constantly gives love to all those around him.

And although he may seem silent, he suffers the same pain as those around him and is eternally together with all his subjects through his love.

In conclusion, Although Endo's Christ figure is not literally written in his books, it reflects the bible in its detail.

